

Far Away

Attention

R-18

オメガバース設定

暴力・殺人の描写があります

Far Away

Day2	5
Day1	13
Day3	26
Day4	40
The beginning of things.....	59
Day1	77
Fugitives.....	81
Day5	91
The conjugal tie.....	102
Day6	107
Day7	121
In days of 12 years old. /S.....	144
In days of 8 years old. /I	147
Day8	151
To the south.....	183
あとがき	188

alpha beta omega dynamics

狼の群れは、一組の繁殖ペア（番）を中心とした家族を構成する。雌雄それぞれの最上位個体を「アルファ」と呼称する。

群れ全体で繁殖ペアの子育てを助ける。十分に成長した雄は群れを離れ、雌は群れに残るのが一般的だが、単独での狩りが難しくなる冬季には群れに入る個体が多くなる。群れの中でアルファの座を勝ち取った雄は繁殖の機会も増える。

アルファ以外の個体はアルファに従属する。アルファの下位を「ベータ」以下ギリシャ文字順に呼ぶ。

最下位の個体は特に「オメガ」と呼ばれ、未熟な個体が位置する。

オメガ個体は、主に群れ全体のストレスを軽減するという役割を持つ。そのため、群れで狩った食料にもありつけず、時には群れの仲間から虐待されることもある。

群れに残るメリットがなくなった個体は群れを離れて一匹狼となる。その後は他の群れに加わる、番を見つけて新たな群れを作る、などの手段で生存することもある。

Day2

轟轟と降る夜雨に水没する心地だ。

「…っふ、あ、アア！」

硬い床の上は埃で覆われていて、手足で擦れた箇所が白く本来の色を覗かせる。

「…ッィイ！…い、あ…、はっ…あ！」

ぽた。ぽた。ぽたり。雨漏りで小部屋の何処かが溜まりを作る。

「もう…ッ！はや…つく…！！アアア…！」

破れ汚れたカーテンの色はくすんだ赤。ぐしゃぐしゃに折り重なって、僕らの下でひしゃげている。大窓幾つ分の面積になるのだろうか。

「ア…ア、…ハアッ…！あ、いっ…！いな…ほっ…！」

喘ぎの合間に霊する遠景の銃声は、洪水のような雨音のせいで他人事のように耳に響く。

吐く息は白い。肌は湿って中は熱い。

彼の手が両頬へ。冷たい。同じ一個の人体で、どうしてこんなに温度が違うのか。

「い、…あ…」

熱っぽく潤んだ瞳に不服そうな色が浮かんでいた。余所見をするな、と言いたげだ。
「……ごめん、スレイン」

左右の脛にキスをして、香る水滴を舌で拭う。果実のように甘い。これがオメガの体液の匂いであり、味であり、まるで毒。アルファの理性の籬を跳ね上げ壊すオメガの誘引フェロモンという名の蟲毒だ。

「ハアッ、ハッ……！ ま……だ……っ？ う、アア……！」

仰け反った首の鬱血は斑でどこか病的だ。散った桜の花びらに首を切られるように、ぐるりと首を一周する吸い痕。全部自分がつけたものだが、僕の齒型はそこに一つもありはしない。

「う……あ……！ あ、イきた、い……、っは、あ、いなほ……っ！」

両足が腰に回って踵が背中を性急に蹴った。痙攣し始める内部はでろりと熱くそして柔い。

「っは……んう……っ！」

「……っく、っは、……は」

噛みたい。噛んでしまいたい。今この瞬間、首を取り巻くそのキス痕の上に齒形を残せば。うなじでなくとも、きつととても……。

「あああっ、あ、……ッアア！ ああああ……！」

ボツボツボツ。窓ガラスを横殴る雨。我に返り、頸動脈へ迫る前歯の接触を避ける。

「ハアッ……！ハア、ハ、ア、あ、……あ……！……うアアッ……！」
しがみ付いて離れない両腕と両脚。そして媚肉。絶頂に近い。頭が沸騰して茹だる。
白い首。首。首。皮膚に透ける肉と骨。頸動脈の蠢き。喉仏の陰影。鎖骨へ繋がる筋の
線。

「う、……つく、ふ……！」

「あ……！……！」

びゅううう、がらん。

がらん。

がらん。

足が硬直し、筋肉が震える。

仰け反る喉笛。

乱れる髪。

食虫植物のようにグロテスクな内部。

「あ、ア！アア……！ハアッ……、ア、あ、ツアあア……！」

そして絶叫と聞く鐘の音。

「……っは、……あ、ハア、ハア、ハア」

がらん。

がらん。

がらん。

雨音。風音。ガラス窓の軋み。

「……いいいな、ほ」

口は半分開いたまま、白い花弁が落ちるように瞼が閉じる。首はがくと仰け反り頭は重力に従って後方へ。咄嗟に伸ばした手のひらに、頭蓋の重みを受け止める。

「……………何？」

聞くが返事はない。いつもそう。意識を手放す寸前に、もの言いたげに僕を呼ぶ。

がらん、がらん。

がらん。

がらん。

煩い。煩い。鐘の音など、今は聞きたくなんかないんだ。

鐘楼を通り抜ける豪雨で廃教会の鐘が鳴る。

馬鹿なことをしたかもしれない。それでも、間違ったことをしたとは思わない。僕は決断し、彼は選択した。後悔はない。

アルファ、ベータ、そしてオメガ。三つの性別について、その宿命めいた生殖本能に

ついで。

番なんてものは恋だの愛だのに酔った連中の世迷言くらいに考えていた。フェロモン誘引を都合よく綺麗な言葉で語っただけだと。オメガに引き寄せられるのはアルファだけではない。ベータもまた、オメガを判別し、そしてうなじを噛めば番となる。

馬鹿馬鹿しい。そう思っていた。幼い僕は、その一説に軽蔑の混じったため息を吐き出し、黴臭い本を背伸びして棚に戻した。

『オオカミと同じ』

そんな本能など、理性で抑えられると思っていた。だって僕は人間だ。そんな、人の尊厳を無視した愛の形があつてたまるか。それは愛じゃない。暴力だ。凌辱だ。剥奪だ。人に対して、人が持ちうる欲望の最も禍々しくおぞましい形だ。そうしてずっと僕は蓋をしていた。オメガについて。ベータについて。そしてアルファについて。

しかし現実はず違った。暴力的なまでの性の力。理性を蹂躪し本能を焚きつける。理性を失うということがこんなに恐ろしいとは思わなかった。そんな日が来るとも。

heat

3ヶ月に1度の周期で、オメガ性は発情期（heat）を迎える。ヒート時のオメガは性欲が増進し、食欲と睡眠欲が著しく減退する。発情と繁殖のみに特化し、番のいないフリーのアルファ・ベータ性を強く惹き付けるフェロモン（誘引フェロモン）を発する。

アルファ性との「番（つがい）」が成立することで発情が変質し、フェロモンを放出しなくなる。個体によっては、ヒートそのものが収まる場合もある。

Day1

無謀で、無計画で、そして無様だ。まさかこんなことを自分が引き起こすなんてと、他人事のように驚く。いつだって、無謀でも考えつく全ての可能性を吟味したうえで行動であつたし、無様さは結局のところ生きる上で切り捨てられないものだとして理解していたから。しかしこれほど無計画に、衝動的に、後先も考えず行動する日が来るなどとは夢にも思いはしなかった。

この脱獄、そして逃避行の是非についてオメガのヒートを理由にするには、僕らの関係性は糾える縄のごとく複雑に絡み合っている。

朦朧とする意識の中、夜半に眠りと自慰を繰り返す彼を助手席に乘せてやっと見つけたこの廃墟。崩れかけてはいるが、屋根があり、壁がある。井戸は枯れてはいない。籠る熱に浮かされふらふらになって僕はこの廃教会の扉を開けて、寒さを凌ぐ部屋を探し屋根裏へ倒れ込んだ。床は埃だらけで冷たくて固い。でも、そんなこと気にしている余裕はこれっぽっちも残ってなかった。早く。早く。それだけ。

最初の日。窓に霜が張り付く屋根裏で、白い息を喘ぎと共に吐き出して。擦り傷を体中に作りながら僕らは獣のように交わった。

口に入った埃を唾と一緒に吐き出す。汚す先の冷たい床。ひび割れ焦げ跡のある壁。窓は小さく今は夜。星明りすら届かない。

「っはあ、は、…ん、ンンッ…！ん、…ふ、んウ…ん」

錯乱したように髪を振り乱す彼の口を口で塞ぐ。咥内を噛んだのか、血の味がする。

「っん…！っは、っは、ハア、ハア…」

素肌を求めて服を弄る。床との摩擦で薄い囚人服の襟ぐりと肩が破れた。

血の匂いすら媚薬だ。肌を合わせたい。粘膜を縋い交ぜにして、肉を肉で痛いくらいに擦り合わせて達したい。下衣を取り去ろうとお互い手足を狂ったように動かすが、指に感覚が無い。衣服を腿や足首に纏わりつかせたまま、押し倒した肢体を仰向けから俯せに肩を掴んで半回転させる。意図を察して、スレインの膝が立って腰がネコ科の動物のように淫靡な曲線を描き揺れる。

濡れて色づき蠢く器官に、慣らしもせずに突き付ける。

「——アア!!っあ、アアああ…！ああ、ア！」

ぐ、ず、ず、ずる、ぐぐ、ずる、ぐ。

入り口は柔らかくほぐれて濡れていて、簡単に竿の中ほどまで飲み込まれた。温かく

湿った内部が不規則にうねり、更に奥へと腰を進める。

「ウああ……！あ、アアっ！あ、あ、アア！」

小刻みに振動する腰の骨盤の出っ張りを掴んで、奥の箇所を探る。張り詰めでドクドクと脈動する痛い陰茎の先端を内壁につける。

ざり、と擦れた。

「……っあああ！は、ハアッ！」

びくと体が跳ねた。中は絶頂の兆しで次第にひくつき、痙攣の幅が大きくなる。

「そこ、あ、……っや……！」

ざりりとした凹み。ここがオメガの子宮だ。反る背と喉。一繋ぎの脊椎の曲線。腕がピンと伸びて、足が爪の先まで硬直する。アルファとオメガの器官が歯車の凹と凸のように噛み合い離れ、間隙の合致を加速させる。

パン、パン、パン、パン！ぐ、ぐぐ、ぎゅぽ。

カクンカクンと頭が振れる。腕が限界を迎え、スレインは腕を折り曲げ倒れ込み、床の上に腹這いになった。腰だけが高く位置して、白い背は魚の腹のように生々しい。

「ひっ……！あ……！っは……！……っあ、あ！」

全部入った。これで抜けない。

「ああああ！ア、アアッ！ふ、あああ、ああっ！」
声が嘎れてほとんど音声になってない。

僕の目が本能のまま凝視する。
首。

うなじ。

番を成せと。

歯が。

「はあっ、はあ、はあ、ハア、ハア、ハア……！」

ちがうちがうだめだだめだだめだ囁むな。

それでも目は縫い留められたかのように首を見る。

襟足の張り付く首。

その首に。

気づく。

「——アアアアああアア!!っあ、ア、アあ!!——ああ!!」

一歯の痕が。

「……っくう!んっ!……ッハ!」

びゅ、どくどく、どく。

どく。

どく。

どく。

射精の後、肛門管の捻じれる痙攣が数秒続き、緩やかに止まった。

「…ハア、ツハ、ア…。ハア…」

結合したまま、脱力してぱたりと床にへばり付いた彼の背に乗る。背中に密着させた胸と腹が、他者の温度を捉え粟立つ。今更気温に気付く。ここは寒い。脱ぎ損ねた服の隙間に赤い擦過傷が無数に出来ていた。

「ヒ…ツ…、イ…う…く…」

後ろから犯して、楔で捉えて、睦言もなく唸り声を上げ衝動のままに精を放つ。こんな、人じゃない。

獣と同じ。狼と同じだ。

「…い」

瞼を閉じたままスレインが何か言った気がしたけれど、眠ってしまっただけで聞い直すことはできなかった。体内の分泌物に起因する多幸感と、壮絶な眠気が意識を襲う。

まだ射精は続いている。これが終わるまで、このままだ。

初めてつて、もっと綺麗なもんだと思ってた。混濁する思考の中、他人事のように自分にはやく。

寒さで目を覚ますと、もう日は高く昇っていた。小窓から差し込む光に顔を覆う。体力の低下からだろうか、性衝動はかなり落ち着き、かわりに空腹を感じる。手足に衣服を纏わりつかせたまま、僕は床に心中死体みたいに転がって眠っていた。

意識がはっきりしてくると、身体が起き出し背筋がぶるぶる震えた。部屋はあまりに寒い。僕は本当の死人のように青褪めた寝顔のスレインの体にジャケットをかけて、他に着る物や、敷き布団の代わりになるものはないか探すことにした。

幅の狭い階段を下りる。

礼拝堂の天井は崩れて空が覗く。ステンドグラスは光を透かし美しく、朽ちかけたマリイ像は幻想的に佇んでいた。これは現実だろうか、と僕は思う。

廃墟の教会。こんなところに辿り着くなんて、変な感じだ。人がいなくなつて長いらしい。床にはガラス片や木片が散乱している。焦げ跡は戦闘の跡だろうか。それとも被災か。

神父の居室で、毛布を一枚見つけた。大部屋の筆筒から、尼僧服を二着。井戸は使える。台所で鼠に齧られたタオルを一枚。寒さを凌ぐにはとても足りない。仕方がないので、そこら中のカーテンを片端から引き剥がした。褪せた深紅は血の色にも見えた。

それらの布地を数回に分けて屋根裏に運び入れる。往復の度顔を覗くがスレインはまだ眠っていて、本当に死んでないか。と何度も口に手を当てた。呼吸をしている。眠れるなら、その方がいいか。起こすのも忍びないので、凍死しないよう調達した布地を次々被ると、こんもり小さな山ができた。

次に軍用車から、中にあった食料と備蓄と武器を屋根裏に移動させた。スレインはまだ起きない。バッグ二つの中身を検める。携帯コンロ、葉缶、缶詰、乾パン、サバイバルナイフ、ペットボトル、シェラカップ、救急セットにアルミの保温シートにこまごまとした数日分の日用品。

あと、コンドーム。備品リストには載っていたけれど、自分が使う日が来るとは思わなかったな。十二個入りの箱が合わせて四つ。ヒートが終わるまで足りればいいが。

僕は水を飲んだ。思いのほか喉が渴いていて、ボストンバッグのペットボトルは一つたちまち空になった。井戸水で補充しないと。

スレインはまだ眠っている。アルミのシートを掛けると、光が反射した。そうか、昼。小窓の下、見下ろす視界で木々の間の迷彩色が目についた。フロントガラスががびび割れて、あちこち凹んだハンヴィーだ。車があったら目立つ。ようやく思考回路が働きを取り戻してきた。隠すより捨てよう。スレインはまだ起きない。僕は彼を残して車に乗り込みキーを回した。よし、動く。ハンドルを握り周囲の空や木々を見た。運転している間は、前進するからなのか思考は後戻りしない。案外単純だ、と自己分析する。数

十分進むと、開けた場所に湖を見つけた。水の色は青。アクセルを固定し、車体から飛び降り車を湖に捨てた。環境破壊になるが致し方ない。生きるためだ。山中の教会もすぐ見つかるだろうが、ヒートの間だけでいい。あと六日程度、誰にも見つからず生き延びなければ。

湖面が青空を鏡のように反射する。見ていたくなくて、僕は足早に湖を去った。

山道は歩くと遠く、昼頃出たのに廃教会に戻ったのは夕方だった。大扉を開けると、夕日に染まって絵画のように荘厳な礼拝堂が広がっていた。視界の中に人。スレインだ。祭壇の近く、最前列の長椅子に座っている。彼は僕に気付いて振り向いた。顔色は悪いが、スレインは僕を認め微笑んだ。

近くに歩み寄ると、椅子の背凭れで見えなかった服装に気付いた。

僕が山にした布地の中から探り当てたろう。寒さのため、黒く古めかしいデザインのない黒い長衣の丈は踝。裸足だ。ああ、彼の靴をどうしたのだったか。もしかして、車と一緒に沈めてしまったのかもしれない。

「調子はどう？」

腰を屈めて聞くと、スレインは肩を竦めた。

「最低だ」

隈が濃い。眠っても、ヒートの最中は完全に疲れが抜けるわけではない。

「……どこに行っていたんだ？」

棘のある言い方に聞こえる。泥のような疲労が今ごろ膝にきた。

「車を捨てに」

そう言うのと、彼は首を左右に振った。髪は埃と体液がこびりついてばさばさだ。極秘施設は清潔な場所だったのだな、と今になってそう思う。

「……そのまま、僕を置いて逃げたら良かったのに」

ぽつりと言った。以前の僕なら、この言葉で喧嘩になったかもしれない。でも今は、微かに滲んだ感情を汲み取ってどこか浮かれる。口を尖らせて、少し遠い目をして目を逸らす彼の顔を見下ろすと。心細かったのかもしれないと思ったりして。

「あ、寂しかった？」

聞くと、スレインは目端を吊り上げ僕を睨んだ。

「どうしてそうなる」

そっぽを向いてツン、と顎を上げる。思わず笑みが零れた。あれ？どうして笑うんだ、僕は。ここにいるのは、あのままあの場所にいたら、スレインは黠り者にされて死んでしまうと思ったからだ。そのあとの紆余曲折はオメガのヒートに呼応しただけ。と考えるにはあまりに理屈が足りてない。いくらオメガの誘引フェロモンが強烈でも、嫌いな相手に触れられるわけもないだろう。なら、どういうことだ。

ぐう。

…腹の虫は空気ってものを讀んだりしない。

「…お腹空いた。何か食べよう」

提案すると、スレインはぎこちなく立ち上がった。腰回りの布の動きが目に残まる。

「…うん」

オメガの直腸。子宮の位置する下腹の中。あの薄い腹の内臓で、僕の精子は生存しているのだろうか。

水を汲んで屋根裏に上がると、部屋を中心に赤い円ができていた。カーテンを蛇腹に折って重ねて、茶色の毛布と濃紺のジャケットが中心に掛かっている。

スレインはもぞもぞと毛布の下に潜り込んだ。そうか。オメガのネスティング。

発情期のオメガは巣を作る。番のあるなしに関わらず、好意を抱くアルファの私物をかき集め寝床とする、ネスティングと呼ばれる行為だ。僕らの間に好意があるかどうかはひとまず置いて、巣作りはオメガの本能であり、ヒートに必要な不可欠な行為でもある。アルファのフェロモンに包まれることで、性交の際の衝動性の上がり方が格段に緩やかとなる。ベータ同士のカップルと遜色ないような、一応人らしい意識を保つことができるわけだ。回復力も高まる。彼が極秘施設で迎えたヒートで健康状態を著しく悪

化させたのは、この巢が無かったからだ。アルファの不在、巢もなく、抑制剤もない。衝動に翻弄され、精神を蝕まれ、食事を摂ることも眠ることすらできなくなる。僕は監視カメラの映像記録でそれを見た。

しかし着の身着のまま、人を一人殺し、かっぱらった軍用車一つで飛び出した僕らには、巢になるようなものがほとんど無い。

「乾パン食べられる？」

「…いや、いい」

スレインは小さく首を振った。

「肉は？缶詰だけど」

次は心底嫌そうなしかめっ面。まあ、確かに。気持ちちは分かる。

「…水でいい」

「何か食べないと」

ごろん、とスレインは巢の中で仰向けに転がった。胸元に抱え込んだ濃紺の軍服を顔に寄せすう、と息を吸い込む。それを見てみると、顔がかあつと熱くなった。

バーナーで火を起こす。湯でも、飲んだらあったまる。カチャカチャと支度する僕を、スレインはガラス玉のような目で自と見ている。

「…伊奈帆」

「何？」

「……………食べるより、二人でいたい」

ビロードのカーテンの渦の真ん中にこんもり丸まった彼の姿は、卵を守る巣の鳥のようだ。僕は鳥でも番ではないが。

「…そりゃ、僕もそうだけどさ」

あの衣装を剥ぎ取って、裸体に覆いかぶさりたいとは思うけれど。

「ま、身体が資本だから」

缶切りをギコギコ動かしていると、スレインがふん、と聞こえるように鼻を鳴らした。

「朴念仁」

毛布を引き摺って這い寄ってくる。陸に上がるアザラシみたいだな。

「それ、たまに言われる」

水をステンレスのカップに掬い、手渡した。スレインは金属の凹みを神経質に数度撫で、ぽつりと聞いた。

「言われるって、誰に？」

『朴念仁』

机の並んだ教室。昼休みの喧噪。学校指定の青いジャージ。オレンジ色のカタフラクト。動かぬ兵科教練の時間割。パレード。九十八円の卵。人、人、人。ビルの窓ガ

ラスに映り込んだ炎と煙。ミサイル一つで、あっさり切り替わった日常の光景。
ユキ姉。

韻子。カーム。ニーナ。ライエ。
あと、起助。

『伊奈帆』

ギザギザの蓋をくつつけた缶詰を設置し、バーナーに点火する。赤い炎、青い炎、透
明な空気の揺らぎ。静かな燃焼の音。

「友だち」

「ふうん」

もう、会うこともないだろう。既に会えない人もいる。

盥に溜めた雨水に湯を足す。湯気が立ち昇り、視覚的にも温かい。雨水で濯ぎ絞ったタオルを浸す。

「それ脱いでこっちに来て」

窓の光は瑞々しい。輝かしい朝日は、昨日までの大降りが嘘のようだ。

「寒い」

巢の中、顔半分が布から現れこっちを向いた。

「綺麗にしないと」

「どうせ、すぐ汚れるのに」

睨むと溜息が聞こえた。黒のシスター服を脱ぎ捨てて、毛布をかぶって引き摺ってきつた。二人で馬鹿みたいに寝続けてもう三日目。いくらなんでも、そろそろ臭いが鼻につく。

「意外に几帳面だな」

「意外でも何でもない。元から僕はこうなんだ」

「ふうん」

によき、と差し出された腕を拭く。寒暖差に粟立つ肌。僕は今、人の身体に触れている。支えた肩に海猫の幻影。今では眩しく遠い。

無言の時間。

「…なあ、伊奈帆」

「何？」

背中の汚れを拭き取りつつ、彼はいつから僕をそう呼んでたっけ。面会室で会話をしていた頃は、スレインは僕のことを界塚と呼んでいたはずだ。そう多い回数ではないが。ほんの数日で、色んなことが変わった。場所も服も、名前の呼び方も。自分の動物としての部分についても。変なの。

スレインが、彼の背から肩を拭く僕の手を握り止めた。この手が駒を進める様が記憶に鮮やかだ。するり、と彼は自分のうなじを逆手で撫でる。淀みない動作は芝居的一幕のようだ。彼は肩越しに僕を見た。

「お前、どうして嘔まない？」

ぐくりと生唾を飲んだ。音は聞こえたらうか。

「…首のこと？」

「そうだ」

それ以外にはない。アルファとオメガの間には。

オメガのうなじをアルファが嘔む。これはアルファ・オメガ間の本能的な特質。この行

為を経てアルファと番ったオメガは、誘引フェロモンが変化する。これまでのように不特定多数の雄を引き寄せるのではなく、番のアルファ一人に作用するようになるのだ。

「…気分じゃない」

「噛みたそうに見える」

それはそうだ。白い頸椎の影。紅潮し香る果実の芳香。犬歯を滴る唾の雫。性交の際、けななしの理性を振り絞って耐えている。だって、おかしいだろう。オメガにとって、番うことができるのはただ一人のアルファだけ。もしそいつが死んでも、他の奴と番っても、一度項を噛まれたオメガは二度と番を作ることができなくなる。それでも変わらぬ発情期は訪れ、番以外との性行為には体が拒否反応を示す。さらに番でない相手であっても妊娠出産は可能。オメガにとっては理不尽極まりない、番というシステム。

「僕は……」

言いたいことがまとまらなくて黙り込んでいると、スレインがタオルをひったくって、自分で体を拭き出した。肩。二の腕。胸。腹。凹んだ下腹。皮膚の下、直腸には僕にはない器官が存在している。オメガの子宮。

「…別にいいんだ。噛んでも。何が変わるわけじゃない。ヒートはやってくるし、避妊をしなれば子どももできる。…ただ、お前が噛めば僕らのフェロモンは変化する」

そんなことは知っている。だから噛みたくななんだ。

「…それで、君はどうなるの？」

無防備なうなじ。今この瞬間、噛むことはおろか両手で締めることもナイフで切り付けることもできる。吹き出す鮮血はどんな匂いで、どんな味だろうか。

スレインは首をまっすぐに伸ばした。

「そうしたら、お前以外は受け付けない」

それは気楽だ、と彼は言う。僕には、その意味がよく分からない。

「どうということ？」

汚れたタオルを温い湯に浸し、スレインは絞った。膝を立てて、今度は足の裏を拭いている。河原の白い石のような膝小僧。反対の足を拭く頃、スレインが口を開いた。

「フェロモンが変化すれば、他の連中が見境なしに襲い掛かってくることは無くなるだろう。お前の子どもを産むなんて悪い冗談だけれど、お前とのセックスは嫌いじゃない」
「ちやぽん、と湯にまたタオルが泳ぐ。もう湯気は消えた。」

「だったら、番った方が気楽だと思っただ」

絞ったタオルでごしごしと頭を拭き出した。表情は見えない。

番のオメガは、二度と番を作ることはできない。なら。

「僕が君より先に死んだら、君の身体はどうなる？ 発情期を越えられるの？」

オメガの生體。その欠陥。命を宿するため命を削るその様は差乍らマリアの受胎を思わせる。

「さあ。経験したことないから知らないが、死なない程度に壊れるんじゃないか」

壊れる？

「どこが？」

スレインは振り向いて自分の側頭部を人差し指で叩いた。そんな顔で笑うな。

「そこかしこ。中も外も。繁殖の為だけの生物になる。そんな気がする」

正気を失い、奇声を上げて吐瀉物にまみれ腰を振る。そして死ぬ。遠からず。

「それは生きてるって言える？」

「さあ。それでも心臓は動いて、子宮は子を宿すだろう。僕の意識の有無に関係なく」
白い朝日を切り取る窓枠。濃い影がギロチンのように白いうなじに線を引く。

「死にたいの？」

真摯な横顔はぼつりと答える。

「さあ。ただ今となつては、正気でお前以外に抱かれる気もない」

盥の水は薄汚い。

その水にタオルを浸して、僕はシャツのボタンを開けた。

Nesting

オメガ性による巣作りの習性（nesting）のこと。

オメガはヒート期間、好意を抱く相手もしくは番となった特定のアルファ性の私物（衣服、装飾品など）を収集し、寝床とする。巣に使用したアルファ性の私物が多いほど、産まれてくる子どもがアルファ性となる確率が高まる。

巣作りに成功した個体は、アルファのフェロモンが作用しヒート時の急激な性欲増進、食欲・睡眠欲減退が抑えられる。

巣を持たないオメガは、発情期に不特定多数のアルファ・ベータ性と性交する。

渴く。

スレインが目を覚ますと、毛布の中で背後の腕に抱かれていた。瞼を開くが視界は真っ暗。まだ夜更けだ。

「……みず」

手を伸ばす。壁際のデイバッグは気が遠くなるほど遠い。当然届かない。身動きもできない。原因は背後。腰回りを両腕を抱きつかれている。寝ているのに、この腕の力はどういうわけだろう。剥き出しの腕が寒く、毛布の中に引っ込める。

「……さむい」

腰と胸をきつく抱く腕に触る。さほど太くはないが、鍛えられて硬い。肘から手へ、骨の形に指を這わせてみる。伸びやかな筋。締まった筋肉の凹凸。健康で頑丈な男の腕だ。手の甲。関節の出っ張り。太い血管。胼胝で感触の異なる指の皮膚。短い爪。硬い指先。

カタフラクトを駆り銃を握る戦神の腕。軍人の手。界塚伊奈帆という男。かつて何度も相まみえ、星の海で殺し合った。宿敵だった。銃を突きつけ発砲した。どちらかが死ななければ、終わらないと信じた。何が終わらないと思ったのだったか。自分か、世界か。しかし今生きて、そして。どうして。この腕が手が、どうしてこうも優しくこの汚れた肌に触れるのか。

確かに敵であった男。しかし、敵でしかない男ではなかった。

「…ん」

耳の後ろで呻き声がした。起こしたか、と思い伸ばした手を戻す。しかし、肩口に髪と額が数度左右に往復しただけで、また寝息に戻った。

「…伊奈帆？」

返事はない。眠っている。何だ、今の仕草。大きな子どもみたいだ。

知らず微笑んでいたことに気づき、戸惑う。いつから、こんな風に？

「…情が移っただけだ。こんなのは愛じゃない」

ましてや、恋であるわけない。

この廃墟で淫蕩に耽りもう何日目だろう。まだ一日目のような気もするし、何年もここにいた気もする。これは繁殖のための行為ではない。今の僕らの関係は、本能の焚きつけるまま快楽を貪る二匹の獣。アルファとしてオメガとして。

あの面会室。毒ガスのようなフェロモンに満たされた密室での選択は正気か狂気か。収縮する瞳孔で互いを見つめ、そして、界塚伊奈帆は手を差し出した。僕はそれを掴んだ。きつと、何度時が戻っても同じ選択をする。しかし、その上手い説明を未だに僕は見つけられないでいる。

オメガだから？

脱獄の機会を得たから？

彼なら僕を殺してくれると直感したから？

彼の真実と僕の真実が決定的に異なるのに、完全に理解ができるから？

どれも、どこかちぐはぐで納得できない。オメガのヒートに中てられた彼の姿を見てみたかった、という興味は多少あった。あの屈屈極まりない顔が、どのように歪むのかと思つて。結果的には、面白くもなんともなかった。界塚伊奈帆は界塚伊奈帆であり、初めて見せる雄の本能ですら裏も表も本性もなく、彼そのものだった。

考えるほど分からなくなる。この男は自分にとって何なのか。どうして、彼が僕を選んだのか。他者を殺しても、僕を生かそうと手を引き走りだしたのか。

そして今、遅いかいなの抱く力は強くあつても決して痛くなく温かいのは。

腕の力が強くなった。そして緩む。長い呼吸。

「…起きたか？」

「うん：」

耳の後ろで寝ぼけた声。

「腕、離せ」

力が弱まるどころか強まった。

「なんで？」

不満気な声、に聞こえる。

「水が飲みたい」

「ああ、ごめん」

あっさり解放された。少し拍子抜けする。寢床から這い出すと寒い。そういや、服はどこにやったのか。探すのも面倒だ。裸でディバッグを掻き回し、ペットボトルを見つけて取り出す。蓋を捻り中身を飲むと、やわらかい水。井戸水だ。こいつが汲んできた。

「スレイン」

伊奈帆の声。見ると、毛布からひょっこり顔を出してこちらを見ている。

「何？」

「…いや、僕にも水ちょうだい」

「…ほら」

放り投げるが、届かず床に転がった。彼は毛布を体に巻き付けたまま身を起こし、ずりずり移動しそれを拾った。

「お腹空いたね」

「…そうかも」

確かに、体は軽い。胃も腸もすっからかんだ。

「火を起こして、何かあったかいもの食べよう」

伊奈帆は半端に体に纏わりついたシャツのボタンをテキパキと留め、皺だらけで床の上に平べったくなっていたストラックスに足を通した。

現実に引き戻る。

「…今、何日目だ？」

日付の感覚もない。

「三日目」

伊奈帆は即答した。

まだ、それだけしか経ってないのか。

「正確には、極秘施設の面会室から七十九時間」

転がっていたデジタルウォッチで時刻を確認した。

ヒートが終わるまで、あと四日。

瞼を開く。青白い光が壁面の経年劣化を浮かび上がらせる様は幻想的だ。夜明けに近い時刻。伊奈帆は肌寒さを感じ、被った毛布を引き寄せた。まだ寒い。敷き布代わりにかき集めたカーテンの端を足で探り、爪先を滑り込ませる。ぬるい温度は冷えた足に物足りないが、まだまだ。

こっん、と硬い膝頭が当たった。毛布の中で膝から下を絡めると、体温が分かる。火照って熱い。呼吸は深く一定だ。

顔が見たいな、と思い、伊奈帆は肘をついて上半身を少し起こした。布の隙間から冷気が入り込んで寒い。放り捨てられた年数とここ数日の行為により汚れ籠えたカーテンの布地を胸に抱き隙間を埋める。曇った小窓から差し込む光は青く淡い。

スレインは伊奈帆に顔と体を向けて半身になり、顔の前で手を軽く握った寝姿でそこにいた。伊奈帆は隣の寝顔、瞼の閉じた半球面を見下ろし思いを巡らす。随分おかしい関係に落ち着いたものだ。ヒートの発露と殺人、強奪、そして逃亡。行く先もなく、帰る場所もなく。アルファとオメガの肉欲に応じるがままの利根的な日々。これがまだ数日のこと。

ヒトであることが先なのか、アルファであることが先なのか。分からなくなる。性交の度に感じる自己の喪失感。満たされない渴きは どうしてだろう。

番であれば、違つたろうか。

珍しく後ろ向きな思考が通り抜け、伊奈帆は自嘲した。こんな笑い方をする日が来るとは思わなかった、と自己分析。

方々に跳ね、絡まった金髪を梳く。埃がついて、少し脂っぽい。しばらく洗っていない。髪も体も。昨日から雨が止まない。もっと気温が高ければ、例えば梅雨の気候なら、雨で水浴びつていうのもいいかもしれない。しかし今は六月ではない。その上雨は氷のように冷たい。いっそ、雪の方が暖かいとも思うほど。

髪から肌へ。削げた頬に隈が濃い。また痩せた。ヒートの最中は、普段よりさらに食が細くなる。固形食も砕いて水でふやかさないと食べられなくなる。もっと、卵とか、果物とか。栄養のある食事を用意してやりたいとは思うのだけれど。それは今の僕には不可能だ。

日に日に憔悴する肉体に無理を強いるのは罪悪感も募るのだが。しかしアルファとオメガが発情期を理性で看過できるわけでもない。何にせよ、こんな安らかな寝顔を見るようになったのはここに来てから。それは、前よりいいなと思う。

伊奈帆は金髪から覗くうなじ。淡く残る歯形をなぞる。
この歯形をつけた人間の顔も声も僕は知らない。

「…雨、いつからだ？」

静かな声にどきりと脈打つ。まだ閉じたままの瞼の端を指の背で撫でてみた。涙の乾いた後が白く粉を吹いている。舌で舐め取るとしょっぱい味だ。薄く開いた瞼から覗く焦点の虚ろな瞳。

「起きてたの」

「寒くて」

そう言って、スレインは目をぎゅっと瞑って丸くなった。

石造りの床と壁。低い天井。窓は長方形の小窓が一つ。殺風景な屋根裏部屋だ。あるものと言えば、埃と黴と、重ねて折った寢床替わりのカーテンと毛布。ディバッグ二つとハンドガン。脱ぎ散らかした衣服。そして部屋の隅に不穩に捨て置かれた木製の巨大な十字架。真上の屋根根には、緑青の鐘の音。窓の向こうには、天を突く針葉樹。

深い森の廃墟の教会。残る衣服や調度品から、修道院であったのかもしれないと思う。壁一枚外の、細い雨による絶え間ないノイズ。ここはスリープを強いられたブラックボックスのようだ。

「雨は、ずっと降ってたよ」

スレインが細く目を開けた。重そうな瞼は腫れぼったい。眠そうだ。

「夕べも？」

「そう。すごい雨だった」

「…気づかなかった」

焦げた料理を食べたみたいな苦笑い。この顔は、あれだ。照れてる顔だ。さっきので何回目だったかな。この屋根裏に籠って四日。一日に十回前後は身体を重ねているわけだから、もう二人分の両手両足の指で足りないくらいの回数か。

今更だなあとも思うけど。
変な事態になったものだ。僕はそれまでの十八年間で、一回だってしたことなかったのに。

「…お腹空かない？なんか食べよう」

スレインの照れ顔に僕も恥ずかしくなってきた、こんな気の利かない会話の転換をする羽目になる。

「…面倒くさい。それに寒い」

「食べないともたないよ。それに僕はお腹が空いた」

毛布から這い出すと体中に鳥肌が立った。寢床にもう一度戻って暖を取ろうか、一瞬思ったものの、スレインが毛布をずるずる引き寄せ頭から被って丸くなり、すっかり僕の入る場所は無くなってしまったので諦めた。

「お湯を沸かすから、コーヒー飲んで体を拭こう」

しかし待つ間あまりに寒い。体中べとべとだが、取り合えず服を着こむ。肌と布地の間が気色悪い。雨水でもいいから、後で洗おう。乾くまで、どのくらい掛かるだろうか。

携帯コンロとペットボトルをデイバッグから取り出し、火を起こす。青い炎の先端に水で満たした薬缶を置いた。立てた膝に肘をつけてその光景を眺める。

ステンレスの内部。水の対流を音に思う。湯を沸かす。こんな簡易な作業でも、調理の過程は心が安らぐ。この後の工程は、インスタントコーヒーの粉を溶かすだけだけれども。

目に炎を映したまま、脳内で所持品を検める。水は井戸から調達できるが、食料は残り僅か。いつまでも、二人で寝てばかりはいられない。この場所もいつ知れるか。乗り捨て沈めた軍用車はもう見つかったろうか。戻ることは危険だ。この先は、歩いていくしかないだろう。

カタカタ、カタ。

湯が沸いた。白い湯気が吹き出している。

「お湯が沸いたよ」

間があつて、もそもそ、と顔の上半分だけ布からにゅつと出てきた。

「…寒い」

「そうだね」

それには同意だ。

揃いのシェラカップに目分量で粉を入れ、湯を注ぐ。インスタントでも、一応コーヒーらしい匂いくらいはある。

「あつたまるから」

両手に持って近づくと、毛布に包まった上半身がのそりと起き上がり、両手が現れた。

「はい。君の分」

手渡す湯気のやわらかなシェラカップ。

「…ありがとう」

受け取る手の硬い形。その手になぜか神々しさを感じ、遠い雨音が鼓膜を打つ。気づけば僕は彼の伏せた臉に隠れる瞳をじっと見ていた。

「スレイン」

「何だ」

ふう、と湯冷ましのため窄めた口が、言葉を待つて閉じられる。僕はこの心情に相應しい言葉を探し黙り込む。スレインは、僕の言葉を辛抱強く待っている。表情は、昨夜の狂奔が嘘のように静かに凪いでいる。よく見たら、擦過傷が顔に細く赤い筋を幾つも作っていた。

雨音。そして匂い。湿気で、嗅覚が過敏になる。黴と煤と汗と血と精液と、湯気とコーヒーと。混ざり合う匂いの光景は戦場で忘れられた死体のよう。コーヒーの湯気を深く吸うと、思ったことが言葉になってストンと落ちた。

「僕は君が好きだよ」

そう。僕はこれを言いたかったんだ。

スレインが口を曲げて鼻から息を吐いた。白い鼻息が消えた頃、彼は湯気の少ないコーヒを口に運んだ。そしてカップの水面をじっと見る。

「…気の迷いさ。抱いた相手に情は移る。それだけだ」

「迷ってはいないし、それだけじゃない」

スレインは目を閉じて首を振った。

「アルファとオメガってだけだ。僕らは。愛じゃない。勘違いするな」

窓の外は雨。木々の緑。影に包まれる室内の重く傾く木の十字架は沈黙を形成する。その横と縦を何度も視線で結ぶ。横。縦。横。縦。隻眼で十字を切る。

首を振る。僕らには、祈れることなど何もない。

「愛ってなんだろう」

スレインは、失敗した福笑いみたいな笑顔で窓を見る。雨が好きなのか。嫌いなのか。

「さあ。僕には分からない」

ざんざかざんと重い雨粒が地上を打つ。

服が邪魔だ。取り去ろうともがくけれど、裾を引っ張っても袖を抜こうとしても上手くいかない。荒い繊維が肌を擦り、乳首の先端が痺れた快感を拾い上げる

「ふ、く、うあ！」

足首まで覆う長衣が足に纏わりつく。上から伊奈帆の舌打ちが聞こえた。

「…っ、これ、邪魔だな」

不機嫌そうな声。余裕が無いのが見て取れて、スレインは少しほっとする。こいつは本当にアルファだったんだと思って。

「破るよ」

伊奈帆はスカートの裾を両手で掴んで左右に引っ張った。

びり、びりびり。

そのまま一息に腰元まで裂いた。なるほど、脱ぐより裂く方が簡単だ。外気に触れた右足がぶると震えた。膝を割る彼の手。膝裏から腿を撫で上げて服の下生素肌を忙しなく弄る。彼の指。固い皮膚は熱い。触れられた場所の性感が過敏になり、結合への期待が高まる。ナカが疼く。奥が熱い。愛液が滴るほど穴を潤すのが分かる。早く、早く。もうおかしくなりそうだ。早く欲しくてたまらない。

「…っはあ、はあ、はあ」

伊奈帆の動きが止まった。肌から手が離れる。何だろう、と焦点のぼやけた視界で彼を見ると左手と歯で正方形の小袋を引き破っているところだった。

「…っ、それ、…いいっ…、から！もう、はやく…！」

手を伸ばすが力は向こうが上だ。装着のじれったさが地獄みたいにもどかしい。まだか、まだか。ああ、早く欲しいのに。グチャグチャに掻き回して、奥を突いて、注ぎ入れてほしいのに。

避妊具なんて着けなくていい。中に好きだけ出せばいい。お前はアルファで、僕はオメガなんだから。

たまらず自分で胸を掴んで扱っていると、腰が密着して穴に先端があたった。両手を両手で顔の左右に縫い留められる。窄まりが待ちかねて餌を貪る魚のようにはくはくと啜え飲み込む。固く尖る先端から徐々に太くなる竿の形を、腸壁の襞が奥へ奥へと蠢き送る。伊奈帆の口から苦しそうな声が漏れ出て、それを認識し体液を絞る動きの間隔が狭まる。

「っああ、アンツ…！アアア！アアア！アアッ！」

抽挿が激しくなり、肉がぶつかる音が腹に響く。ほしいほしい。命のもとを注いでほしい。この肉の内部に、内臓に、全部飲み込んでしまいたい。

張り詰めた伊奈帆の性器がドク、と大きく脈打った。

「…っ、出すよ」

大きい塊に奥の奥を貫かれる。子宮の入り口が亀頭の先端を求めて柔らかく待ち受けて、その子種を受け入れようとしているのに。届かないじゃ、何のために？

「ウア！——ア、っは、あ、~~~~っアアアアア！」

何も見えない。真っ白な視界。感じるのは中のモノの形と温度。ない、ない。届かない。待っているのに。開いているのに。壁に阻まれ届かない。アルファの生命が。精液の濁りが。

「…っは！あ！っはあ、はあ、はあ…」

「…ハア、ハア、ハア」

体中から力が抜けて、瞼を動かすこともできない。

左隣に移動した体温。手が伸びて、僕の額に張り付いた髪をあいづが触った。汗でべとべとになった髪の毛束をそっと掬う。

そんな触り方をするな。いちいち聞くな。毛布を掛けるな。体を拭くな。精子をくれず、うなじを囁んでもくれなくせに。

「…い、…な、ほ」

「…何？」

瞼が重い。意識が遠のく。死に向かうように眠りに落ちる。

お前は一体、僕をどうしたいんだ。

いつ知ったんだったかな。自分が人ではないのだと。揚陸城だったか。暴力が日常になって、レパートリーが単純な殴る蹴る、から性的な暴行に広がってから。初めて尻の穴に異物を挿れられた時、後ろの奴がこう言った。

女みたいに濡れてるぞ、と。

僕もまだ半分は子どもだったから、何を変なことを言っているんだろうと思った。そこは排泄器官で、要するに出す場所で、そんなところに突っ込むなんて正気じゃない。混乱して泣いていたと思う。それでも、その言葉はよく覚えている。赤黒い肉棒に腸壁を掻き混ぜられ、汚らわしい液体を直腸に吐き出され。みつともなく嬌声を上げて、おぞましいのに体の一部は嫌悪の中に確かに快感を絡め取って。自分が動物以下の存在になったような惨めさを感じながら、女の人は、こんな思いをして子どもを作るのかと目の前が真っ暗になった。

姫様のことを考えた。

絶望しかなかった。いつか、姫様も誰かに後ろを貫かれて、痛みに歯を食いしばって、きつと涙を流してそれを受け入れる日が来るのかと思うと。汚い。醜い。浅ましい。こんな行為を知ってさえほしくない。そう思い、倉庫の隅で何人目かに尻を穿たれつつ、僕は胃液を吐き出して泣いた。

毎日続いた。そのうち、身体が先に慣れた。身体を弄られると勝手に濡れて、抜き差しの最中にエレクトするようになった。そのうち、心も死んだ。どうにでもなれ、と捨て鉢な気持ちになった。姫様と会わない日がもう長かった。二年。二度と会うこともないかもしれないと思うと、絶望の暗雲は少し薄れた。知らぬままなら、ずっと夢を見ていられる。汚れない女神の夢を。

『本当に美しい星』

思いがけず再会した時には、汚れない無垢な微笑みを真っ直ぐ見る事ができなくて、僕は変わってしまった自分を呪った。

『光を歪めるほどの、たぐさんの水と空気。すごいですね』

せめてこの方だけは、綺麗なままでいてほしい。痛みも汚れも苦しみも知らぬ、白い光であってほしい。僕はそう願い、行動した。あの無垢な笑顔が曇ることが無いように。引き金にかかる白い指。反動への備えは無い。照準の合わせ方も知らない。しかし目も言葉も、そして指すら震えることはなく、弾丸の発射されない銃口は絶望の風穴を示した。

『あなたはもう、私の知っているスレインではないのですね』

あなたに見せられないものが、こんなにも増えてしまった。あなたの知っている僕よりも、あなたの知らない僕の部分があまりに大きくなってしまつて。しかし、僕の本質がどちらであるかと問われればきつとそれはおぞましい汚濁に塗れた獣の部分で。

——僕はもう、ヴァースの人間ではありませんから。

人ですらないんだ。もうきつと。

僕の思い描いた新しい王国は、それは姫様の思う平和でも幸せではなかった。僕の独りよがりな自己救済に過ぎなかった。アセイラム姫と交わした最後の会話を想起すると、言えなかったことが沢山あつて、どうして僕は何も彼女に言わなかったのだろうか。その後悔が募る。せめて一言いいたかった。貴女が存在が、僕をここまで生かしたのだと。貴女そのものが僕の救いの姿であつたのだと。

僕が自身をオメガだと認識したのは、纏う服の色が青から灰になった頃。初めての発情期が訪れた。ああ、濡れていたのはこのせいかと、と合点した。ザーツバルムは薬をくれた。抑制剤と避妊薬。その両方。本当の子どものように思つてくれていたと、今でも思う。

次第に、便利な身体だと思ふようになった。甘い言葉で誘えば、すぐその気になる伯爵たち。何人と寝たかもう分からないが、彼らは例外なく皆ベータだった。アルファとは、匂いが違う。空気も。

ヒートを経験して、やっと気付いた。自分がオメガであることと、アルファが確実に存在する事を。

月にいた二人のアルファ。

そして、地球にもう一人。

火の音。柔らかく暖かい音。目を開き、その音を追う。壁際で振り向いた男はオレンジ色の炎に色を染めこちらを向いた。

「起きた？おはよ」

この、界塚伊奈帆という男。

Ω omega

オメガ男性は直腸の奥に子宮と同じ機能を持つ生殖器があるため、発情期にはアルファ・ベータ男性やアルファ女性と性交し妊娠することが可能である。精巣は退化しており無精子症であり、そのため生殖に関して種側になることは出来ない。

個体差はあるが、10代後半から「ヒート」が現れ誘引フェロモンにより社会的な生活を維持することは困難となる。

発情期の身体的不調は、抑制薬で緩和できるが、効果は個体によって異なる。品質や本人との相性で効きが悪く完全には抑えれないケースも多い。

抑制剤と避妊薬は別であり、抑制剤を使用していても避妊をしなければ、発情期中のオメガ性が性交した場合妊娠は可能である。

The beginning of things.

オメガだという。

「本当ですか」

面会の日を繰り上げた極秘施設の応接室のソファの上に下ろした腰を微かに浮かせ、伊奈帆は再度聞いた。

「スレイン・トロイヤードがオメガ性だ？」

「検査をしました」

監理官の情報を反芻する。

絶滅危惧種のオメガ。

「今更、どうして分かったんです」

「それは発情期で…」

口を濁す職員に、伊奈帆はほぼ正確に事の背景を理解した。

「監視カメラは、正常に作動していましたか」

「はい」

「見せてください」

「…はい」

立ち上がり、職員が先導し監視室へ向かう。

性別は枷だ。

男性と女性。世間で市民権を得て認知されているのは、おおよその二種類の性別。これは極論で、人の性とは多様でそしてもっとパーソナルなものだ。性別のない人間だっているし、トランスジェンダーという枠に放り込まれたそれぞれの性別も様々だが、スレインに関して重要なのはこの先の話であるから、そこは置いておく。

アルファ、ベータ、そしてオメガ。これらの性別の呼称について、現在では知らない人間が大多数だ。学校でも習わない。図書室に行けば、本くらいはあるけれど。それほど、この性別は特殊なのだ。

第一次惑星間戦争以降、地球に生存する大多数の人間はベータとなった。まだアルドノアを持たない人類が、夢を抱いて月へ飛び、そして火星を目指した。その船に乗っていたのは二種類の人間。アルファとオメガ。アルファは支配階級として、オメガはアルファの繁殖のため、火星へと飛び立った。だからここからのアルファとベータ、そしてオメガの特性は、僕らが生まれるよりずっと前。人間が一つの惑星の中にいた時のこと。

ベータとは、今の地球人においてほぼ全てを占める人種だ。ベータ同士で婚姻を結ぶのが、過去も現在も一般的かつ大多数である。

アルファとは、遺伝子に優位性を持った人類のこと。生まれつき社会的階級が高く、優遇されていた。人口のパーセンテージは ∞ %程度。希少種だ。七百億人いれば、二十一億人がアルファという計算になる。これは昔のことだけだ。

そしてオメガ。希少とされるアルファよりさらに数は少ない。全人口の $\bigcirc$ 、 $\bigcirc$ 一%とも、 $\bigcirc$ 、 $\bigcirc$ 一%とも言われる。はっきりしないのは、短命だからだ。

発情期に、オメガはフェロモンを発しアルファを誘引する。これはどんな理性的なアルファであったとしても抗えない身体的反応を示し、交合に至る。三ヶ月に一度の割合で訪れる一週間の発情期は、ヒートと呼ばれる。ヒート時のオメガに対し、何人で、どのように、いかなる場所でも性交を強要したとしてもその行為は黙認される。彼らの繁殖は社会的な義務と位置付けられていたからだ。原始人類ならともかく、社会を形成し知能も思想も感情もある人間が晒される環境としては最悪だ。極度のストレス、そして人為的災厄から、オメガ性の人間の多くは、二十代から三十代の繁殖期を終える前に死亡する。

しかしそれも、もう半世紀近く前のこと。今の地球には、オメガもアルファもない。いたとしても、居場所はない。

薄暗く、モニタの電光が眩しい室内。何度か来たことのある場所だ。そのときの映像

が脳裏を過る。魘される寝姿。狂人めいた譫言と自傷。ただ一点を見つめ死体のように静止した瘦身。それらのどれも見るに堪えない姿ではあったが、これから目に映る光景を想像して一度深く息を吐く。

「少尉。こちらです」

ブルーライトに目を細める。いくつかのウィンドウが並んでいた。職員がコンソールを操作し、一つの映像が拡大され画面を掌握する。独房だ。スレインがいる。ベッドに横向きに倒れ手足を折り曲げ胸を抱いている。遠めの画像だが、眠っているわけではない。もぞもぞと怠そうに身体を動かし、彼は俯せに丸くなった。

「編集されてはいませんか」

「はい」

その言葉、どこまで信用できるか分からないが。

独房の扉が開く。

音声の無い、画素の荒い映像でもはっきり分かる。夢遊病者のように誘い込まれる看守の足取り。一人。二人。三人。向かう先の寝台でダンゴムシのように蹲り上下する背。薄暗い照明。六本の腕が丸い背に伸びた。暴かれる。足と、足と、手と、手。四本の腕が拘束する四肢は抵抗を示すが、全く効果が無い。力ない抵抗に煽られるように、暴虐の加速度が上がる。引き裂かれ破れる衣服。解剖台の上にピン止めされたモルモットのようには開かれ扱られる内部。慣らしもせず性急に結合する箇所への反応。顔は見えない。

見えるのは、ピストンに合わせ看守の背の上に揺れる膝から下だけ。

記録されない、声と音。この時、叫んでいたのだろうか。泣いていたのだろうか。それとも、呻いていたのだろうか。呆けたように口を開いたか、悦楽に嬌声を上げたのか。それとも何も言わず、ただ歯を食いしばっていたのだろうか。

唐突に、彼の五体が大きく痙攣。反り返る喉。その凹凸。電池が切れかけたおもちやの人形みたいになじこちなく止まる動き。交代した。また始まる。

三人目が終わり、また戻る。今度は一人目と二人目が同時に。スレインは動かない。取り囲む男らは屍体に群がるハイエナのような。気持ちが悪い。こんなの、動物と同じだ。人間もまた、動物であることには変わりはないけれど。

「いつまで続くのですか。これは」

「約三時間、です」

モニタの再生時間は現在二十八分を示している。あと二時間半。

「どうして、そんなに？」

監理官は苦々しい表情で目を細めた。

「異常を察知して独房へ向かった刑務官も、暴行に加わりました」
今映っているのは三人の看守と一人の囚人。

「何人？書いてなかった」

「四人です」

ミイラ取りがミイラに。

開いたままの扉から飛び込んだ刑務官は二人。まだ後から二人来るのか。スレインはベッドから引き摺り下ろされて、床の上で取り囲まれている。

「彼らは今どこに？」

「医療機関です」

「スレイン・トロイヤードは？」

「独房です」

「治療は？」

「完了しています。命に別状はありません」

この暴行から、八日。僕に伝わったのは今朝。ヒートが終了したから。と歯噛みする。馬鹿にしているのか。しかし過ぎた時は戻らない。

「…無事ですか。彼は」

「着床していませんでした。そういう意味では無事です」

吐き気をもよおし、唾を飲み込む。今朝は何を食べたのだったか。そんなことも思い出せないくらい動揺している。

「認知されているオメガ性の地球人は、他にいますか」

床上で蹂躪される瘦躯に、焼ける地面と蝶の死骸に群がる蟻を連想した。

監理官がモニタの映像を録画から現在のものに切り替えた。

「第一次惑星間戦争の十年前から、オメガバース機関は活動を終了しています。現在は存在しません」

だろうな。地球人口のほとんどを占めるベータは、自分の性別すら知らないだろう。ベータの性別は男女そのまゝの顕在であるから。

スレイン・ザーツバルム・トロイヤード。

年若い敵将。月のフェンリル。全ての咎を負わされた大罪の囚人。

その彼は、絶滅危惧種のオメガであった。こんな事態は想定外だ。

「上層部は何と？」

「何も。寝耳に水です。現状維持を命じられました」

様子見、はいつか終わる。その先に枝分かれする未来の想像は、どれも不穏であった。

「会えますか。今日」

「はい。少尉はそうおっしゃると思いました」

だから、今日やっと僕に連絡したのだ。ヒートが終了したことを確認してから。

扉が動く。いつだって、この前で一瞬、立ち竦む。中で待つ一人の男と対峙する事は、自分にとってはおそらくこの世界の現実という枠の外。魚が陸に上がるような、朝顔が

夜に咲き初めるような、雲が深海を流れるような。そういった、理の境界がここにある。手前の椅子。テーブル。上には何も乗っていない。そしてその奥の椅子に座る人物に相對する。

まず、瘦せた。

「……調子は？」

こんなに蛍光灯の光は目に痛かったか。眩しさに数度瞬きをし、僕は焦点を対面の双眸へと結ぶ。伏せた目。視線は交わされない。布地に隠れ切らない痣と傷痕。肌は血の氣が引いて乾き、額、頬、目の端には内出血の色彩が薄氣味悪く浮かんでいる。首の手形と鎖骨の鬱血。二の腕の指痕。凌辱の痕のその上に、蚯蚓の這ったような引つ掻き傷が無数にある。血が滲んでいるものも。きっと、テーブルの下見えない両手の十の爪の間には乾いた固い血がこびりついている。

「絶好調に見えるのか？」

喋った。声は前と同じ。会話が成立することに安堵する。

「見えない」

「その通り」

スレインはシニカルに口角を引いた。さあ、お前は どうする？ そう問われているような氣がした。

机上のチェスは、蓋を開いてもいない。

ただ見る。そこにいることを確認している。ずっと。
聞こえない。何も。静かな空間だ。

彷徨う思考の跡を辿る。金の毛束の硬度。青い服の皺。白い肌の斑。テーブルの凹み。
壁の色。天井の汚れ。蛍光灯の継ぎ目の白黒。

スレインは億劫そうに椅子に凭れた。軋む音。

「…無口だな、今日のお前は」

声。密やかな。その口の、青褪めてひび割れた唇の形。

フラッシュバックする、ノイズ交じりの監視映像。

「君の性別がオメガだって聞いた。知ってた？」

スレインはあっさり頷いた。

「自分の事だからな」

冷静な声音。凧いだ目だ。

「どうして、隠していたの？」

軽蔑を多分に含み、彼は鼻を鳴らした。

「言えると思うか？」

言えるわけではない。社会的最下層に位置する、希少種のオメガ性。過去には蔑まれる
未来を悲観して自殺するケースだってあったのだ。現在は、保護機関もなく法もない。

「これまで、どうしていたの？」

「どういう意味だ」

聞き方が悪かった。スレインが眉根を寄せて顎を引く。

書面の経歴、調書の記述。火星、揚陸城、そして月。たった一人の地球人として、彼が辿った過去。どこまで真実かは判断できないが。

「男性との性交経験があると聞いている」

「ああ。…変な聞き方だな。それ」

そうは言われても、僕には他にどう聞けば良いか分からない。

「その時はまだ体ができてなかったから、妊娠に至らなかったんだ」

揚陸城での二年間は、と彼は目を伏せ口角を歪に上げた。

「毎日毎日、何人も飽きもせず突っ込むんだ。役立たずって、それしか能がないってな。性奴隷さ」

その物言いが頭にきて、僕は小さく舌を打った。薄ら笑いが氣に入らない。

「月で過ごすうち、ヒートの兆候が顕れた。ようやく合点がいったよ」

「合点？」

「男に犯され悦んでいる、この浅ましい身体につくりに関してさ」

自分でも反吐が出る、とスレインは吐き捨てた。

「ヒートが来る頃には伝手も資金も十分で、薬は簡単に手に入るようになっていたよ」
何の薬か聞きたいか、と聞かれ、返事の代わりに無言で睨みつける。

「それで、お前は何が聞きたい？」

聞けることなど何もない。

「君は、僕に聞きたいことがある？」

「ある」

襟元から覗く鎖骨の凹凸は、痛々しいほど影が濃い。この傷跡が残る皮膚と骨の形に窪んだ薄い胸部は、しかし雄の劣情を煽るには十分であろうとも思う。薄布の一枚下、被虐の染みついた裸体の性は男性でありオメガ。

組んだ腕を机に置いて、身を乗り出して彼は言う。

「お前はアルファだろう。違うか」

その彼が、僕をアルファだと言う。なるほどな。

伊奈帆はゆっくり瞼を閉じる。そして、長く静かに呼吸した。

分かるんだ。オメガには。

「違わない」

頷く。自分の性に、初めて確信を抱く。

「抱きたいと思うか。僕を」

スレインの表情から薄ら笑いが消えた。目の光は深く青い。

「思わない」

何の冗談か、と思う。あまりに馬鹿げている。しかしそれを言葉にして発声すること

は出来なかった。首。首が目につく。赤い斑点の数を星座のように辿る。こんな風に他の人間を凝視したことはない。

「なら、もう来るな」

突き放した言い方は、初めて面会した時を思い起こさせた。あれから、何度もここで顔を合わせ、チェスを交えた。それだけ。あの日から、僕らを取り巻くすべてのものは何も変わっていないのに。

「どうして」

スレインは首を振った。

「お前は、オメガのヒートを知らない」

ヒートは三か月後。

「また、来るよ」

会えるといいが、それも怖い。自分の一部はそう思う。

自分がアルファだと気付いたのは、小学生の時だ。僕は最初に図書室の図鑑で、次に図書館の専門書で、そしてネットの情報でアルファとオメガについて知識を得た。

誰にも言わず、誰にも知られず成長した。そのうち、自分がアルファであるということは意識の底に沈んだ。けれど、恋愛というものをどこか冷めた目で見、自分とは関係がないものとして距離を置くようになったのは、深層心理に、自分は異端だと刻み込まれてしまったからかもしれない。小さい頃から、色々な部分が人と違うらしいと気付いてはいたから。集団は異端を排除すると知っていたから。

性愛の話について。

女性の肉体を、美しいとは思う。しかし、それは美術館で裸体像を見ることに近しく、性的な興奮を覚えることは無かった。恋人、結婚、性交や自分の遺伝子を引き継ぐ子どもという人間の営みを他人事に捉えていた。

しかしセラムに、彼女に出会い、僕にも少し分かった。自分とは違う存在を自己の一部のように身近に置き、そして一部となることへの衝動のような願いを持つこと。その手段として、肉体の合致に帰結するのは安易だとは思いますが、理屈と感情の一端は理解できた。

今思うと、セラムもアルファだったのだろう。彼女の存在は、他の人間とは全く違う感触だった。彼女の声に含まれ目に宿り肌に感じる澄んだ光のようなもの。僕が初めて知った恋のかたち。南国の海のような、彼女の瞳と同じ色の光。近くにいると暖かく、脳裏に白い花が淡く香る。彼女特有の色と温度、そして香り。それが蝶の鱗粉のように肌を纏って、彼女の肉体はきらきら光って見えていた。その光を見て鼓動が高まり、一部としたい、一部になりたい、という意思を自覚した。自分にも、そんな部分があったんだと驚いた。人らしい、特定の誰かに執着し、欲望を抱くと言うこと。それは愛という言葉でリアルにもヴァーチャルにも溢れる人の性の在り様。

恋が、愛が。怖くないと言えば嘘になる。それは自分とは違う自分を見出す行為だから。

スレインにも、光が見えた。セラムとは全く違う性質の光。

ノヴォスタリスクのチャンパー。見る前から、背中に感じた光の温度。とても冷たい。肩越しに振り向くと、彼の肉体を覆う薄い膜のような光が見えた。今にも消えそうで、霧のような朧で霞む光だった。

銃声は彼が先。銃口の火花の中、硝煙ともに微かに香ったのは凍れる森の雨の匂い。

どうして海に落としたか。

どうして銃口を向けたのか。

どうして最後まで敵としていらなかったのか。

どうして地表から星に手を伸ばすように焦がれるのか。

今ならわかる。理屈や利害は後付けだ。それか、都合の良い配置にあったただの駒。互いに危険だと認識した。だから銃を突きつけそして撃った。自分を破壊する対の存在を。

Day1

彼がオメガと判明したからと言って、たちまち状況が一変するわけでもない。たった一人のオメガを有用する機関も設備も金の出処もない。スレインが、極秘施設の地下でたった一人、世界に居場所を失った一人の青年であることに変わりはない。僕は面会室で彼に会う。青白く痩せぎすで、伏せた目の先にあるチェス盤。僕らは駒を動かし、時々言葉を交わす。どちらかがキングを手中に収め、僕は面会室を去る。彼も独房へ戻る。二人だけの取り決めのように、同一のスケジュールをこなす。三か月間、他愛のない話題をただ紡いだ。空や星、天気。草花について。彼の骨格標本に近しくなった指の細さに胸騒ぎを抱きながら。

そしてあの日。

面会室の扉を開けた途端、濃度の高い液体に包まれたように呼吸が痞え蹈躡を踏んだ。形容しがたい、複雑な空気。一番近いのは香る植物。土の匂いがした。そして光。僕は手を顔に翳し、一度固く右目を閉じ視覚情報を遮断した。膨大な光の予感に恐れを抱いて。

この、空気中に離散されたアルファの理性を駆逐する分泌物。分かる。身体が知っている。オメガのヒートだ。この凄まじい現象に、ここにスレインを連れてきた刑務官は気づかなかったのか？

左眼窩にアナリティカルエンジンが無くとも、僕の肉体を構成する細胞の全てが理解した。嗅覚から、視覚。体内の分泌物の変容。体温そして脈拍。オメガのフェロモンに呼応する、アルファの肉体。思い知る。猛々しい本能を。理性の脆弱を。自分は、ただの動物に過ぎないのだということ。

上手く呼吸ができない。胸が苦しい。腹が熱い。抗うことができない。

「…調子はどうだ？」

スレインの声だ。椅子に脱力して座り、喘ぐような呼吸の合間のその台詞。今それを言うとは、中々皮肉が効いている。調子なんて、最悪だ。歯ぎしりで思考を繋ぎとめる。人でありたい。誰よりも、こいつの前では。

こいつの前でだけは。僕は界塚伊奈帆でありたい。

「…君と同じだ」

手汗で濡れるドアノブを握ったまま、僕はそう答えた。激しい動悸と渇く喉内。思考が鈍り、頭が割れるように痛い。今の僕は、どう見えている？監視カメラとマジックミラーの外の目は、僕の姿をどう判断する？

「はは」

だから来るなど言ったのに、と苦しそうに喘ぎ彼は笑った。

破片と崩壊の明暗が心象を形成した。理解する。そして、決める。

手放すことを。帰ること、今日と似た明日、安全の保障、ユキ姉、家族、友だち、約束。

風が吹く。錯覚だ。潮の香りは彼じゃない。

『スレインの言った通り』

鳥の群れ。空と海。

『救って』

そんなこと、できない。

手を。ただ手を。

机を挟んで、距離は二メートル。

「手」

僕は左手を伸ばした。紅潮した頬と涙目で、スレインは眉を顰める。

「今度は君が掴むんだ」

見開く目に星が宿った。にやりと不敵に笑い、スレインは机に両手をつき体を支え立ち上がる。二歩目でよろけ、机に腰がぶつかった。チェス盤が机から滑り落ち、駒が床に四散する。転がる駒を蹴散らし、三步、四歩。

あと一步。

「…ああ。チェスには飽きた」

静脈の這う白い手が、僕の手を掴んだ。その手を引き、扉の外に駆け出す。エマージェンシーシグナルの喧噪の中、右手に銃を左手に手を。君の手を。確かにこの手に掴んでる。ちゃんとある。大丈夫。そこにいる。

絶対放すものか。

握り締めた手の熱さはどちらのものか分からない。

山道の振動で座席の身体が跳ねる。向かう先の当ては無い。

「ハア、ハア、ハア……」

隣のシートの荒い呼吸に触発され、意識が朦朧として視界がぐらつき狭まる。サイドウィンドウは全開だが、狭い車内に滞留する空気が肺腑を満たし血液を巡る。アルファの本能が理性に成り代わり身体を支配し始める。

「……くそ」

息苦しい。熱い。下腹が自分のものじゃないみたいだ。冷汗がぼたぼた落ちる。膝が震える。手汗でハンドルが滑る。

ガタン！

「うあ……！……つく」

岩石に乗り上げ、車体が宙に浮く。永遠に続くような一瞬の浮遊感。

「っは、あ。……っだ、じょうぶ？」

シートに叩きつけられた助手席の体軀は糸の切れたマリオネットのようだ。球体関節があっちこっちにバラバラ向いて、目はぎょろりと動いて僕を見た。

「っう…、…ア、ハアッ、ハアッ…」

耳がおかしくなる。アクセルを踏み込む。今隣を見るといけない。意識を持っていられる。視点を必死でフロントガラスの向こうへ。木、木、木。いつの間にこんな場所に來ていたんだ。時刻。車体のデジタル時計。熱い。施設から時速百二十キロで二時間。道のりは半分以上記憶にない。らしくない。こんな出鱈目な逃亡、僕を少しでも知る人間なら何か裏があると思うだろう。生憎、そんなものはカケラもないが。

「…あ！」

岩石。目一杯ブレーキを踏む。しかし止まらない。反射的に右手が彼の前に伸びた。なぜ。目を瞑る。二段階の衝撃。岩を乗り越えきれずぶつかった。

「ク…力はッ…！」

アクセルもブレーキも踏まない車体は岩石に堰き止められて動かない。エンジンはそのまま。まだ動く。バックしないと。ギアハンドルに手を伸ばそうと意識を右へ向けた。吐息が耳と鼻を掠めた。慌てて鼻を塞ぐがもう遅い。

「ッハ、ア…、ハア…」

汗の匂い。だけではない。濃い匂い。花のような、霧のような、苦い果実のような体臭。汗で濡れたシャツが肌に張り付く気色悪い感触を知覚する。冷えているのに、熱い。粘つく生唾を嚥下。目が。ああ、閉じようとするのに。

見てしまう。抗うすべもなく。

スレインは足を座席の下に投げ出し、自身の両肩を抱いて固く目を閉じていた。薄青の囚人服の肩を掴む指先の関節が反り返って、指先は真っ白だ。こんなに強く力を込めたなら、服の下は肌は痣になっているに違いない。

「ハア、ハア、ハア」

浅く忙しない呼吸。吐いて、吸って、吐いて。また吸って。

眉間の皺を汗が伝った。眦が火照って赤い。瞼に通う血管の一つ一つが見える。睫毛の落とす頬の影は小刻みに震えている。薄く開いた唇から前歯の白が覗く。首筋に張り付く髪金は束になって。

そして目が。無防備に透き通る碧が。

瞬き。見えて、隠れて、また見える。鮮やかすぎるほどの碧が切れ長の両瞼の間で左右に揺れた。

「ハッ…、う、ハア、ハア…」

熱に浮かされた充血した眼球の瞳孔が大きく開く。

気づけば、その目がすぐそこにあった。僕の左手はサイドウィンドウを鷲掴み、右手は彼の左耳へ。金糸に隠れた熱い耳朶に触れ。喉仏を四指の爪で撫で。うなじを手のひらで包む。

薄い皮膚の下、心臓のように脈打つ頸椎。ここから香る。

「ハア、ハア…」

「ハア、ハア、ハア……」

もうどちらの呼吸か分からない。頬の産毛まで見える距離。双眸は見開いたまま。

「ふ……」

接した唇は震えてる。どっちも。

「う……ん、……んッ」

離して、触れる。また引いて、そっと押し付ける。狭い視界の端、病的なまでに白い腕が僕の首の後ろに伸びた。誘われるまま体を寄せる。彼の手が髪を掻き混ぜ背に爪を立てしがりみ付く。

シートと体の間に手を入れる。汗で張り付く粗い布地がもどかしい。素肌は熱く湿って手に吸い付く。傷跡だろう感触の違う皮膚と、等間隔に並ぶ脊椎のスロープを上下にまさぐる。接した服越しの腹部が熱い。押さえつけた身体、脚が後ろに回って踵が腰でクロスした。

「……あ、………っふ。………ん、ん」

舌で歯列をなぞり、頬肉を押し、上顎を突く。咽喉まで、その奥まで、中身まで、そんな事しか考えられない。狭い。遠い。まだ遠い。もっと近くに。もっと一つに。

手探りでレバーを操作する。ガクン、とシートが後方に倒れた。

「……は、……ア、ア、ハァッ……！はや……く……」

譫言が毒のように甘く響く。

「はあ、はあ……、つくそ」

「……ハア、っん！……ん、んっ」

軋むシートとエンジン音と、獣のような喘ぎ声。森のただ中、半壊のハンヴィーの中には脱獄の囚人と謀反の軍人。

好きとか、愛とか、それとも恋か。そんな感情の入り込む隙間もない本能的な衝動に支配されるこの心地。最悪だ。スレインを、彼を。僕とただ一人、痛みを共有できるであろう青年を、貪るように蹂躪する日が来るなんて。

汗で光る白いうなじが。

「アア！っは、ア……！ふ、あ、ああア……！」

だめだだめだだめだ。噛むな。片っ端から手放した理性の空洞で、こびりついた微かな自我で、必死で立てそうになる歯を堪える。

ズボンを二人とも穿いたまま、打ち付け擦り付ける陰部は合致を求めてやまないが、脱ぎ去りたい欲望を、互いの首根にしがみついて看過しようと試みる。

「……ッハ、ハ、……っう！」

イきたい。出したい。締め付けてほしい、肉壁で扱いて、奥にぶつけない。ナカはどんなだ。数枚の布越しでも痙攣が伝わる。楔を待つて蠢くここは入り口だ。オメガにとつての。

僕は彼がオメガだから犯したいのか？アルファという本能のままに？

「うあ、アア！ッあ、アア！——アアア！」

倒したシートの上で背中がアーチを描き反る。僕の肩に指が食い込み、僕の腰を腿が挟み強い力で抱き込む。スレインは電気ショックを浴びたようにビクンと体を跳ねさせて、僕に纏わりつく彼の手足は脱力して死体のように重くなった。

「ッ……ハアッ！ハアアッ！ハアッ、ハアッ、ハア、ハア、……ハア」

固く閉じた目。脱力した両腕がぼす、とシートに落ちた。

エンジンの小刻みな振動。

彼の呼吸。

彼の匂い。

彼の温度。

仰臥する痴態。

「ハ……ア、ハア……、ハア……、……ッく、ハ、あ……」

濡れた染みが布地に広がる。

それを見て、本能のまま反応する僕の身体。張り詰めて痛いくらいに昂った獣の部分。

吐き気がする。

「……はあ、はあ、はあ」

見下ろす顔は、ずっと瞼が下りたまま。開くだろうか、と睫毛の縁を見ていたが、呼吸が整い、寝息に変わった。髪に伸びそうだった手を握る。今更、何をしようとしてる

んだ。

「…スレイン？」

そつと聞いたが返事はない。完全に眠った。そういや、寝顔なんて初めて見たな。アイドリリングの振動。寢息。体液の臭い。停止した車体から見える空は昼日中。

「…参ったな」

勃起したまま、しかし射精する気にもなれなくて運転席に戻りハンドルを握った。

「…行こう」

しかし、どこへ行くってんだ。

α alpha

発情期のオメガ性に接すると、さかり (rut) と呼ばれる発情状態に陥る。どんなに理性的なアルファであっても抗しきれない強烈な発情状態を引き起こし、時に暴力的なまでの性交に及ぶこともある。

アルファには抑制薬が存在しないため、さかりがついたアルファを発情状態のオメガが止めることは事実上不可能である。

アルファ男性の性器には、根元に精液を溜める亀頭球 (knot) がある。性交中にオメガの体内で拳大に腫れ上がり、射精が終わるまで抜くことはできない。受精の確率をあげるためである。

いた。

木漏れ日の中、彼はいた。界塚伊奈帆。

晴れた日に吹く風を、随分久しぶりのことと感じる。さっきまで雨が降っていたような気もするが、時間の感覚が曖昧だ。ここに來たのはついさっきだった気もするし、何年も前のような気もする。正気を失って過ごす時間は嵐のようだが、それも随分落ち着いていた。ヒートに慣れてきたということか、もう終わりが近いのか。何にせよ、ようやく天気くらいは認識できるようになったのだ。僕は。

目が覚めると一人だった。別にそれが嫌だとか、ましてや寂しいというわけではない。褥を誰かとともにすることには常に暴力と凌辱が付随していたから、一人の方が気楽でさえある。性行為について、僕は毛嫌いしているわけじゃない。だからといって、誰かれ構わず尻を振るような色狂いでもない。誰も信じはしないだろうが、僕だって相手くらいいは選べるものなら選びたいし、できれば合意の上で枕を並べ、睦言の一つも交わしてみたい。痛いのは嫌だし、気持ちよくなりたい。

選んだかどうかはともかくとして、「合意の上で」「痛くなくて」「気持ちいい」しかも

時折睦言めいた謔言を口にする。その初めての相手があいつだとは思わなかったが。番ではないアルファ。界塚伊奈帆。僕らが辿ってきた関係性から至るこの事態はあまりにも馬鹿げていて、今でもこれは悪い夢ではないかと思う。

彼を縛るつもりはない。しかし、この見も知らぬ、どことも知れぬ場所にヒートの最中放置されてはたまらない。だって、僕が掴んで走ったにせよ、最初にあいつが伸ばした手なんだから。最初に意識を取り戻した時の、寢床の隙間の残り香を吸ったあの心地。置き去りにされたかもしれない、と。冷静に考えれば、界塚伊奈帆はそんな理不尽なことをする人格ではない。しかし、冷静さを欠いた発情期に理性を信頼できはしない。彼が戻ってくるまでの数時間、たった一つ残された彼の私物である軍服に鼻を当て、小山を形成するカーテンを畳み重ね、少しでも居心地よい寢床を作り、そして寒さを凌ぐため服を着た。修道女の衣服を身に着けるのには微かな抵抗もあったが、背に腹は代えられない。礼拝堂で、ステンドグラスの光を浴びて、ひび割れたマリアの微笑みを見上げ、ただ帰還を待った。途方に暮れていたと思う仕方がない、と頭が受け入れる現実と、八つ当たりには違いがない感情がぶつかった。成りゆきにせよ、せめてヒートが収まるまで、あいつには僕と寝る義務があるんじゃないのか。火つけたのはあいつだし、何度も何度も会いに来て。僕は確かに、もう来るなど言っただけだ。

青空だ。

太陽は真上よりやや傾ぎ、午後の陽射しが木漏れ日の絨毯を地面へ描き出す。伊奈帆は、教会の裏手、井戸に背を凭れさせ地べたに座り込んでいた。

「伊奈帆？」

居眠りでもしているのだろうか。あと数歩。横顔が見える。膝を立てて、そこに肘を置き、リラックスした座り方だ。ただ、右目は開いていた。眠ってはいない。空を見ているのかもしれない。顎がやや上がり、首筋がくっきりと浮き出て普段は目立たない喉仏が出っ張っている。

そこで目を凝らす。伊奈帆の腕。何だ、あれ。

前腕部。手首から肘の変色。木々の影が濃く、よく見えない。一步。もう一步。こんなに近づいて、この男は本当に気づいてはいないのだろうか。

日の光でよく見える。異様な色だ。どうして赤い？あの色は何だ？

「…」

もう、あと五歩。そこで理解し、はっとする。だらりと下がった手の甲、親指の付け根にも赤。カーブを描く点線は瘡蓋の色。あれは歯型だ。歯型だらけの前膊だ。自分の腕を噛んだのか。あんなに何度も。

どうして。この首を噛めばいいじゃないか。それで全て事足りる。

「……はあ」

そして、伊奈帆はため息を吐き出してこれまで僕が見たことのない表情をした。後悔

ではない。不安でもない。悲哀でもない。怒り。憤怒。静かな瞋恚。どうして、と。小さい子どもが鏡やガラスに何度も自分を映して魂の在り処を探るように、自分の所在を見失った表情に見えた。しかしそれは一瞬のことで、聞いたことのない深く長い溜め息の後、途方に暮れた迷子の子どものように寄る辺のない眼差しを地面から垂直の虚空に向ける。

とても、これ以上近づけない。空に向かって、どうしてお前はそんな顔をする？そこに鳥の羽ばたきが。

「あ…」

白い羽が僕らの間に舞い落ちた。それを追った目と目が合う。

「…伊奈帆」

名を呼ぶと目を丸くして、伊奈帆は素早く体を起こした。僕がいたことには、本当に気づいていなかったらしい。考え事をしていたにしても、あまり無防備に過ぎるだろう。

「スレイン？…あ、起きた？調子はどう？」

開口一番がそれか。変なやつ。馬鹿なやつ。僕はこいつに言いたいことがたくさんあるはずなのに、何も言えなくなってしまった。

「…お前こそ」

伊奈帆は立ち上がり、尻についた雑草を掃った。

「いい天気だし、洗濯しようよ」

彼の足元には、散々に凹んだ古びた盥。日光に温められた水は、それでもなお冷たいだろう。

「…うん」

特に隠すこともしない前腕を目端に捉え、僕は右袖から腕を抜いた。

円形の巢の左半円で、壁を向いた身体を後ろ抱く。スレインの耳の後ろ、髪の間を鼻を埋める。体臭は甘くほろ苦い。

うなじを見る。木目細かい素肌に残る古い傷痕。一センチメートルほどの短い線。

「この歯形は？」

指でなぞると、くぐもった声が一度漏れた。ここは、オメガにとって最も敏感な性感帯。くぐもった声の後、スレインは俯せになって巢に顔を押し付けた。

「…これが歯形だと分かるのか？」

変な問いかけだが、確かにこんな小さな傷跡、他の人間は気付かない。

「説明はできないけれど、分かるよ」

アルファだからだろうか。分かる。これは噛み痕だ。僕ではない誰かの。不完全な、フェロモンを作り変えるまでには至らなかった契約の名残。

スレインは組んだ両腕の境目に顎を乗せて小首を傾げた。挑発的な笑みが口元に広がり、上目が鋭く僕を見る。

「ふうん。アルファ同士、マーキングには敏感なんだな」

かちん、と脳内でハンマーが鳴った。表情にも出ていたのか、スレインがけけらけら笑

う。

「気に障ったか？」

「うん」

「そのつもりで言ったんだ」

スレインは右手を自身のうなじに滑らせた。背骨から頭蓋へ一度。指が髪を梳くいそざりと背筋を悪寒が抜けた。

吹く風に窓ガラスが鳴く。

「姫様の齒だよ」

瞬間、風に靡く金の髪と翻る白いスカートの鮮やかな色彩がスローモーションが脳裏に浮かぶ。背景の青い空。音声までもが鮮明に。

スレインが僕を見て眉を上げた。そして顎をしゃくる。

「お前の知らない姫様だ」

「……………ああ」

偽物のアセイラム。海賊放送でしか見たことは無い。ノイズ交じりのセラムの声。

『夫と迎え』

彼女の背後の赤い伯爵服。凜とした立ち姿の敵将の姿。何でそんなのを後生大事に覚えてるんだ、僕は。

「結婚してたって」

にアルファは社会的に優遇され、その遺伝子を優位に残すため二十代以降に婚姻を結ぶ。特にアルファ女性の生殖は特殊なため、監理的に選別された雌と番う場合が多いのだ。

アルファ女性とオメガ男性が自然に出会うことは確率的に著しく低い。現代におけるオメガの希少性を鑑みれば、なおさらのこと。恋愛に性別は関係ないって言うけれど。そんなのはオメガの生態を知らない人間の無責任な言い分だ。

スレインは膝を曲げ伸ばしして毛布を蹴った。振り向き見ると外気に触れた生足の先は赤黒く汚れていた。

「……でも、あの方は僕を抱こうとしなかったよ」

「どういうこと？」

遠い目をして彼は目を閉じ、開いた時にその色は冷たく沈んでいた。

「アルファがオメガに射精する。これは男性も女性も関係ない。アルファには精巢があり、オメガには子宮がある。体がそういう仕組みになっているんだ。知っていたか？」

「知識としては。でも、よくは知らない」

スレインは小さく首を動かした。頷いたようだ。

「アルファ女性には、オメガ男性に挿入する。普段は陥没している性器が勃ち上がり固くなる。オメガに挿入し子種を注ぐ」

男性として生きていた人間が、女性に組み敷かれ射精されるというのは、その現実を受け入れるという。僕には想像しかできない。

「一度で分かった。互いの身体の求める所を」

夕闇の赤い光に照らされたスレインの横顔は、戒律を守るうら若い尼僧のように静謐だった。

「オメガに抱かれるなんて、考えられない。ましてやそれがアルファなら」

オメガは人ですらないんだ、言う彼の肩を抱くこともできない。僕はオメガではないから。

「僕は何度も、肛門をしとどに濡らしながら、彼女の膣に射精したよ。精子のない蛋白質の白濁液を」

彼女はどんな心地でそれを受け入れたのだろうか。王族であり、アルファであり、アルドノア因子の保持者でありながら。

アルファの凶暴な欲。雄の本能。オメガを前にして、自身が獣であることをまざまざと思い知る。穴を埋めたいと、その中で果てたいと、自分の一部を注ぎ込みたいと、その衝動。彼女はアルファでありながら穿つことをしなかった。

「すごい人だな。その姫は」

「ああ」

影の濃い表情で微笑に笑った。その姫のことを思い出しているのだろう。

僕がスレインのうなじを噛まないのは、半ば意地だ。この一歯の持ち主への。

月面の夜は長い。朝など来ぬように思う。

寝台で両肘をつき横たわる彼女の腰にショールを掛ける。繊細なレースに白く華奢な尻の丸みが挽ぎたての白桃のように透けた。

「どうして、途中でやめたのですか？」

肩に軽く手を乗せ僕は聞いた。彼女は愛らしく鼻を鳴らす。薄桃の髪が揺れ、前髪の下の空色の瞳がこちらを睨む。

レムリナ姫と閨を共にするのは初めてではない。男女の交わりを数度重ね、彼女は気付いた。僕は知っていた。彼女がアルファだということと、僕がオメガだということ。

オメガは、他者を身籠らせることはできない。徹底的に産む側なのだ。相手がアルファでもベータでも、男性でも女性でも。アルファ女性性はオメガ男性を妊娠させることができる。しかし、逆はない。オメガは無精子。種がそもそもないからだ。これまでの男女の肉体を持つての性交渉は、児戯のようなものに過ぎない。

「私は、貴方のオメガ性に惹かれたものではありません。それが理由です」

その言葉は本心だろうが、真実だとは限らない。本能は凶暴だ。理性など吹けば散る

ほど。僕は身をもってそれを知っている。

「私を抱いてくださる？」

言葉とは裏腹に怒ったようにそう言うものだから、つい笑みが零れる。気丈な人だ。

「もう、私は真面目な話をしているのですよ」

「いえ、申し訳ありません。お可愛らしくて」

今度は真つ赤な頬を膨らませて、次に枕が飛んできた。受け止め、彼女の隣に寝そべって顔を見る。ぷい、とそっぽを向かれてしまった。

「オメガだと知りながら、私に抱かれましたか？」

火星のプリンセス。月の少女。彼女を縛るアルドノアの起動因子とアルファの本能。なんという不自由な生まれだろうか。

「だから、さっきも言ったでしょう。私は貴方がオメガだから結婚するのではないのよ」
オメガだからレイプされてきた僕には、彼女の思考回路がどうにも腑に落ちない。

「では、どうして私を夫に？」

ぽす、と仰向けになった彼女の青い瞳に覗き込まれて少し怯む。澄み切ったスカイブルー。色は違うが、よく似ている。あの方に。

レムリナは悔しそうに笑った。

「それが分からないから、私は貴方が好きなの」

彼女の細腕が首に回った。熱帯の白い花のような、艶やかな香りがする。彼女特有の

アルファとしての香り。嗅いでいると、尻の穴がじくじく熟れて、穿つものが欲しくなる。シヨールの下、彼女の性器は尖って先を濡らしているだろう。

「私たちの間には、番システムなど必要ありません」

引き寄せられて舐め取った口内は甘い。横抱きになって足を絡ませる。不自由な彼女の両脚を膝で割る。腿で彼女のアルファの中心を擦ると、熱く湿っていた。女性としての性器に男性としての性器を重ねる。膣口がぬめり、陰茎の亀頭に吸い付いた。

「きつと、お姉様なら囓むわ」

腰を密着させて微かに揺らし、彼女は言った。

「そうでしょうか」

「それが貴方の幸せだと疑いもせず、天使のような顔で貴方の皮膚を喰い破るわ」

僕には、それが幸福に想える。

レムリナの手が首の後ろを撫でた。オメガにとって最も敏感な場所に他者の体温を感じ背が反る。彼女は仰け反った僕の喉仏をぺろりと舐めた。ざらついた舌の感触に歯の硬さを連想する。首の後ろが疼く。

「貴方を傷つけたくはないの。歯を立てたらそれが分かったわ」

脊椎の皮膚の表層に食い込んだのは、彼女の右の前歯だけ。その刺激は脳髓をチリチリ焦がし、穴の奥が種を受け入れるため愛液を直腸に分泌し出す。そのくせ、陰茎も欲の放出を求めて勃起する。僕に子種などないのに。

オメガの肉体は、僕の血肉は、どれほど浅ましいのだろうか。アルファの猛りで貫いてほしいと焦がれつつ、女性の媚肉に抱かれないのだ。

「貴方の側にいらればいいの」
不思議なことを言うものだ、と白い花の香る彼女の耳朶に舌を這わせた。

正確無比なヘルツであれば耳に心地よい音階は、手入れされず捨て置かれたため狂っていた。調子はずれのオルガンが奏でるメロディーは聞き覚えがあるような気もするが、題名も歌詞も伊奈帆は知らない。

ステンドグラスが真昼の光を透過する。硝子の赤、黄、白。そして青。床の美しい影を黒く踏んだ。影絵で遊ぶ子どもの心地だ。

「鳴るんだ、これ」

スレインが、足と指を止めた。椅子に座ったまま、尼僧服の肩口を越えて視線が飛んできた。

雲一つない空から、破れた天井の歪な輪郭に、白い光が従順な影を落とす。先の影。そこに佇むパイプオルガンと、尼僧の黒衣を纏う彼。

「そうしている…」

「何だ？」

性別なんて、ここに至るとどうでもいいと思えてしまう。薄汚れ破れた黒衣のオメガの姿は聖女の化身のようでもあると思いつつ。

「…いや、よく似合うと思って。その服」

スレインが微妙な顔をした。怒っているわけでもないし、呆れた顔でもない。着地点を見誤った水鳥のように揺れる瞳で彼は自分の衣服を見下ろし、その色と輪郭を緩慢に視線でなぞった。

「他に着る物が無いんだ。ただの防寒具だ。宗教的なシンボルを僕に投影するのはやめろ」

尤もだ。頭に浮かんだことは言葉にせずとも伝わったらしい。

「ごめん、そうだね」

朽ちた礼拝堂は天使がいても不思議じゃない。らしくもなくそんなことを思うのは、久しぶりに音楽を聞いたからかもしれない。調子はずれの不協和音ではあるけれど。今は様々な感覚が遠い。色欲以外の五感。光や音、空気を新鮮に感じる。

一番近い長椅子の、オルガンから一番遠い場所に腰を下ろす。

「ここで聞いていいかな」

「…でも、下手だ」

スレインが洩る。

「ここにいたい」

じっと見ると、彼が折れた。

「…好きにしろ」

裸足の足がペダルを踏んだ。空気が楽器に循環する。

「誰に、教えてもらったの？音楽」

たどたどしいメロディーは、しかし心地よい。

「歌は、小さい頃に立ち寄った街で。鍵盤の仕組みはアセイラム姫に」
アセイラム姫。

オルガンの和音が耳に反響し、旋律が礼拝堂の空気に色を付ける。

「…嫉妬か？」

無言になった僕に、軽口めいた呟き。

「そう」

規則正しい間隔でペダルを踏む足の形。

「僕に？姫に？」

どちらもとても大切な人だ。

「両方」

特別だ。二人とも。特別の意味は違うけれど。美しいメロディーに、遠い場所を思う。
今頃どうしているだろう。

「…なんて言う曲？」

「お前は知らない」

「だから聞いてるんだよ。知らないから知りたい」

フレーズの終わり。スレインは音を静かに止めた。そして振り向き僕を見る。

「彼方の光」
光。

「讚美歌だよ」

彼は今、誰を想い弾いたのか。

「んっ、ふ…う、う…あ！アアッ…あ、アア！」

組み敷く身体は情欲で蛇のように怪しくくねる。

布の裂け目から白い脚が腿まで現れた。性交の度たくし上げるのもどこかしく、尼僧服の裾を腰まで裂いたのだ。それはいつのことだったか。もう記憶も曖昧だ。

「っは、ああっ！あ、…っもう、ほし…！はやく…！」

濡れそぼった陰部がひくひくと物欲しそうに疼く様に、猛りが一層硬くなる。残り少なくなった避妊具の包装を歯で破り、尖る先端に被せようとする、が、中ほどまで覆ったそれを取り去ろうと手が伸びてくる。

「そ、れ…、や…あ、いら、な…」

制止を求める両手をを仰向けの頭上に縫い留めて、スキンで陰茎を根元近くまで覆う。

「あ…、あ、…っな、なん、で…っ」

肘と膝が詰るようにじたばた暴れる。

上下左右に激しく揺れる腰に足を割り開き腰を進める。先端を後孔にあてがう。ぬる、と具合の好い抵抗と共に飲み込まれ、ぐいぐい奥へと誘われる。

「んあっ！あ、アア、あっ、う、ああああ！」

最後まで挿入りそうになって、慌てて竿を引き戻す。嬌声がさらに大きくなり、濡れた声音が欲情を煽る。引き戻し、そして押し込む。その繰り返し。

「……あ、っあー、……あ、……あ、……ああ」

かくん、と喉が仰け反った。手も足も脱力して、抵抗はもはやない。

喘ぎが呆けたような声音に変わった。体は弛緩して半開きの口が涎で濡れてる。舐めると甘いオメガの体液。右手で拘束していた両手を解く。僕は両手でシスター服が覆う腰骨を掴み固定した。

「……っふ、……あ、ああっ……ん、んっ……んん……っ」

直腸が別の生き物のようにペニスを締め付け緩み絞るように巧みに動く。最後まで、奥まで、根元まで全体を飲み込まれたい衝動に抗う。硬く膨らんだ場所が当たる度、窄まりが激しく痙攣する。呼応するように陰茎が脈動し、精液が亀頭球にぱんぱんに張る。

アルファの男性器の形状は、一般的な人間と少し違う。射精の仕組みが違うのだ。ベータやオメガの男性は陰茎の先端が亀頭になっている。射精は一秒以内の間隔で数回。数秒の事だ。アルファの亀頭は陰茎の先端ではなく根元にある。正確には、ベータやオメガの亀頭部分がアルファの亀頭球であり、犬や狼と同じ形状をしている。アルファの射精は三十分程度。亀頭球には精液が溜まり、射精が終わるまでオメガの直腸で膨らんだまま、抜けない作りになっている。オメガの受精率を上げるためだ。

「…っふ、う…あ、っそれ、…イれ、て、あ…、ア、おおきいの、はやく…っ!」
腰が上がって、スレインは密着した接合部をぐりぐり擦れ出した。亀頭球の半分ほどが彼の中に潜り込む。その温度と感触の心地よさ。

「っう、…ん、んっ!」

ぬめってあつくてきつくて、意識が飛びそうなくらい気持ちがいい。腰が勝手にピストンし、肉が粘着質にぶつかる音。

「んあぁっ…!あ、イイ…ッ!もっと…っ、おくまで…ッ!」

抽挿はどんどん速くなる。こんなに強く打ち付けたら、この華奢な体は壊れてしまいそうに思う。ほとんど全部、限界まで張り詰めた根元の球までが出ては入るを繰り返す。

「…っ、…くっ…う」

イキそう。もう。思った途端、それまで脱力していたスレインの両腕がひし、と僕の二の腕をつかんだ。痛いくらい強く握られ、目が見開く。

「っは、…は、…ハ、ハアッ、ハアッ…!ハアッ…ア!…——アアアア!」

取り合いになった人形の手足のように伸びきった手足と、見開き涙を湛える眼球の半球。白い喉。白い首。首。首。くび。

「アアアあぁッ!アア!!ア、あ、だ…、だし、て…!だして…ッ!!」

すごい動きでナカが痙攣し、本能のままに亀頭球を孔の中に収め達する。ゴムの中に出て、出て、出る。これは全部出し切るまで止まらないし、空になって萎まなければ抜

くことはできない。

「…ハア、ハア、ハア」

きゅ。ぐぐ、ぎゅ。

「…はあ、っ、んっ！ちよ、締めないで」

スレインは汗と涎にまみれた顔で満足げに微笑んだ。

「…ずっと」

続きを待ったが、彼は何も言わない。

「……………ずっと、何？」

繋がったまま見下ろし聞くが、碧の色が深くなり、心は見えなくなってしまうた。

「……………何でもない」

繋がったまま、向かい合って足と足を絡ませて、横向きに腰を抱く。寒いから、できるだけ触れられる場所はくっついて。龟头球が萎み、直腸の0.01mmのゴムが水風船のように膨らみきるまで分離はできない。

寝息に目を覚ます。ここに来てから、耳に馴染んだ彼の呼吸。速いのも、荒いのも、静かなのも無防備なもの。界塚伊奈帆という男は、計算高いようにでいてその実てんで幼

く子どもらしい。

『…ずっと』

自身の言葉に自嘲する。何を語ろうと言うのだ、僕は。寝物語にしても、あまりに道理を外れている。

ずっと、こうしていられたら。そんな未来を、どの口が言う。言えるわけない。

今まで数え切れないほど罠られ犯されてきた。そのことに、今更特別な感想も感情も抱いてない。少しばかり、思い起こすには吐き気とおぞけをもよおすだけだ。

穏やかで心やすらかな目覚め。こんな気分は初めてだ。それは、相手がアルファだからなのか、界塚伊奈帆だからなのか、それとも別の要因があるのか、理由は判然としない。今までと同じなのは、絶頂を死の安楽と感ずること。最大限の惨めさと怒り、痛みと悦楽を感じながら意識を手放し、自分が自分でなくなるその刹那。色も音も感触も、すべて消える。白く。それは同じ。違うのは、次を求め、焦がれること。もっと繋がりたい。もっと感じたい。もっと触れたい。可能なら、目や、耳や、心臓を交換したいと思うくらい。今、薄い膜一枚で覆われた部分の形と熱量を体内に受け入れる心地よさ。膜など無ければ、という不満が募るほど。ずっとくっついて、一つの身体みたい繋がつて、このまま死を迎えられたら。そんなことを考えてしまう。この、姫も愛した男に対して。何という業の深さだろう。

これは、オメガとアルファだからだ。僕はそう解釈する。特異な性を持ち合わせた人

類のはみ出し者。繁殖能力の強さゆえ、一度経験してしまうとその中毒性は凄まじい。もう僕は、他の人間との交合の想像すら受け入れられないほど、脳も性器もその毒に侵されている。

どうしてお前なんだ。

お前がアルファだから。僕がオメガだから。今は発情期だから。全てを動物的本能のせいと棚上げして、僕はこの男と寝ている。

毛布を手繰り寄せる。生温かい温度は彼のもの。触れ合った皮膚は人のもの。これが人。人の性交の模倣。僕らは動物だが、こいつはきつと人でありたいと思っている。

ヒートが終わったら。そうしたら、僕らはどうなってしまうのだろうか。もう、あの薄暗い面会室での出来事は前世の記憶のように遠い。ほんの数日前だというのに。言葉数は多くはなく、手すら触れない。等間隔に位置するチェス。交換される書籍。マジックミラーの四面。監視カメラ。面会終了のブザー。何もかも仮初だ。届かない。触れない。真実らしかったのは机越しの視線だけ。理性の静寂。その隻眼。

『手』

『今度は君が掴むんだ』

初めて触れた手は熱く、初めて撫でた髪は柔らかく。キスの唇が震えていたのを思い出す。睫毛を触れ合わせて見つめた瞳は熱に浮かされながらも澄んでいた。

どうしてお前が。どうして僕は。こんなぐちゃぐちゃになってしまったんだ。セック

スして、人を殺して、行く先も無くて。どうしてこんなことに。ヒートが終われば、僕は理性と思考を取り戻すだろう。その時、一体どうしたらいい。

肛門管に肉棒を咥え込み、その質量に確かに安堵を感じながら。背を打つ鼓動を受け留めるには、あまりに変わった僕らの距離に吐き気がする。

今はただ、この熱情が過ぎ去るのが恐ろしい。

銃声に蹲る。

階下で発砲される銃の数はいくつだ。靴音は？敵の数は？耳を澄ませ目を見開き歯を食いしばるが、全てが霧の中のように思考をすり抜け掴めない。心臓が破裂しそうだ。内臓は素手で無遠慮に掻きませられているように不快だ。腐り落ちるような下腹の熱さ。子宮の疼き。オメガのヒートのバイオリズムの頂点。ああ、上手く物を考えられない。自分の脳は、溶けてしまってもうないのかと思えてしまう。

「ハッ…、ハッ…、ハッ…う！」

息を殺そうと布を噛む。薄汚く不潔な巣の中に潜り込んで、胎児のように体を小さく折りたたむ。固く目を閉じ、噛んで、噛んで、噛みしめる。奥歯が軋んでキリリと鳴った。いけない。声を出すな。息を潜めろ。死体のように微動だにするな。ほとんど死体みたいなものだろう、僕は。

「…！」

「！！……！！」

振動。怒声。銃撃の合間、何を言っているのかは分からない。発砲。一、二発。三発。四発。そして連射。銃声の雨に、残弾を想像する。あいつ、撃たれたろうか。左の視界が利かないんだ。回り込まれたら反応できない。銃のスペアはあったか？

「……!!」

破裂音

何かが壊れる音。轟く足音。足の数は減った。一人。いや、二人。あいつはその中にいるか？死んだか？生きているか？

階段を駆け上がってくる。この足音は、あいつじゃない。

死んだのか？あいつは？

界塚伊奈帆は死んだのか？

「ッはア…、ハア、ハア…ッ！」

声を出すな。舌を噛む。鉄の味が広がった。このまま噛み切ってしまうか。いやだめだ。あいつがいる。きつと、きつと、まだ死んでない。生きています。

増える足音。銃声。ドアを貫通する銃弾は一つ。揺れた扉は開いてない。

「ぐあ…あ」

生々しい呻き声はすぐそこ。もう一度、銃声。ぐしゃりと人体が転がり潰れる音が遠く。

二人がいて、一人が死んだ。

「フー…、フー…」

軋む蝶番。扉が開いた。
人だ。

毛布の下、固い布地を奥歯で噛んだまま耳を澄ます。

足音。その速度と硬さ。

空葉莢の落下音。

ああ。

触れる、布越しの手。

「…もう、大丈夫」

生きていた。

「…ハ、…ハァ、…あ、い、いな、ほ」

彼の手が肩を抱く。ああ、僕はこんなにひどく震えていたのか。

「もう大丈夫。みんな死んだ」

人を撃った手。震えは微塵もない。

「僕は、生きている」

静かな声。

「…スレイン」

毛布が取り去られ、日の光が目を焼く。反射的に閉じた目の近く、頬を彼の指の背が

なぞった。奥歯の力が抜け、ずるり、と口腔から引き抜かれる布地。

「…これ」

明るい視界で、嚙んでいた部分が軍服の肩章だと気付く。濡れそぼった紺の布地。ここに来てからずっと僕が抱え込んでいた彼の衣服。清潔だったそれは僕の涎や精液、愛液で汚れ切って黒ずんで、彼の匂いなんてもうしない。それでもこれしかないから。巢は、これだけだから。

「それ、あげる。もういないから」

静止する手。いつもの声音。見上げた先の理知の瞳。返り血に赤い頬と髪。

「…いい、…いいな、ほ」

身体が動かない。寒さを感じているわけでもないのに震えが止まらない。

「…いなほ。伊奈帆。…伊奈帆」

「うん」

小さく縮こまったまま何度も彼の名を呼ぶ。血に濡れた手が髪を梳いた。

「僕はここにいるよ」

どうして？そう聞くのが怖い。

硝煙と血の匂いは、教会と言う場所に相応しくないのか。それとも、とても似つかわしいのか。部屋の隅にうち捨てられた十字架の焦げ跡を眺め、ここに張り付けになった人間は何人いたのだろうかと想像する。返り血を頬に手に足にこびりつかせて、廃墟と化した教会の屋根裏部屋で凍える夜に身を寄せ合う。荒んだ状況は、しかし言葉だけなら詩的に聞こえるかもしれない。字面には臭いも冷氣も肌に纏わりつく不快感も肉体の兆しすら表れはしないのだから。

爪月の光が微かな夜の帳を引く先。巢から香る果実の腐り落ちる前の醗酵を誘う甘く濃い香り。月より円い巢の中心で、呼ぶ声。

「伊奈帆……」

スレインが呼ぶ。襲撃の後、真上にあつた太陽が傾き沈み月が輪郭を鮮明にするまでの間、僕は壁と巢に離れ、彼は自慰の合間に僕の名を繰り返し呼んでいる。

「なあ、早く……」

焦れた声が巢から誘った。肘をついて寝そべって、じりじり開く脚の右が布の裂け目を割る。すらりと伸びた脚線の白さが、渦巻く深紅の羅紗の上に生贄めいて投げ出された。

巢の赤に、尼僧の黒とその下の白い裸体。そして目は宝玉の翡翠。差し込む星明りには青く淡く、汗と垢の獣じみた香りに花と果実の体臭。淫靡な表情で薄く開いた唇は濡れて、人を破滅へ導く美しい魔物のようにも見える。

「こっちに来いよ……」

不規則な吐息は白く染まる。寒い部屋だ。いつだって、触れる前はそう思う。

「……ハア、ハア。もう、何してる？……早く来いって」

壁に凭れた背を、どうにも離す気になれない。体の中心は穴を求めて止まず、陰部は張り詰め布を押し上げ痛むが、頭の中が冴え冴えと自分の肉体の変調を俯瞰する。本能と思考と感情がバラバラになったようなちぐはぐな感覚。この凍れる硬い壁から背を離れた瞬間、きっと思考は完全に追いやられ感情は支配される。アルファの本能に。それが怖い。

立てた膝。腕に抱えたライフル銃。きつくきつくそれを握る。冷え切った鋼の銃身に理性を繋ぎとめようとする。髪と服にこびりついたのは硝煙。そして鉄の臭い。トリガーの感触。僕の靴は名も知らぬ軍人の血で汚れている。そして手も。服の袖も。

最後の面会室で手を伸ばした瞬間、僕は他の全てを切り捨てた。ユキ姉も、韻子も、カームも。平穏な暮らしや、日常に地続きの未来も。他の全てと天秤にかけることもしないまま、僕は決めた。極秘施設を逃亡する時、車を奪うそれだけのために一人の人間を殺した。そして、今しがたこの隠れ家を探し当てた軍人を皆殺した。三人いた。

獸のように交合し、機械のように排除して、精液と血と硝煙の臭いをこびりつかせて座り込み、そのくせ僕は人でいたい。僕はまだ人だろうか。

『手』

あの時、僕が差し出した手は本能だったのか？それを掴んだ彼の手は？

「もう…、あ…、んっ」

スレインの右手が糸目の荒いスリットの間に滑り込んだ。切なそうな喘ぎが手の動きと連動して鼓膜を震わせる。左手は布地の上から胸を弄り、背が反り腰が浮く。埃っぽく汚れたカーテン生地頬を押し付けて、くねる肉体は神話の白い蛇のように淫靡だ。

「はや…く、あ…、がま、ん…できな…」

くちゆくちゅ鳴る粘度の高い水音。イヌ科の動物のような浅い呼吸。じれったく床を搔く爪先。振り乱す金糸。ぶわりと濃くなる森の香り。オメガのフェロモンが放つ暴力的なまでの誘引。快感の予知に膝が揺れる。身体が茹だる様だ。指の感覚は死んだように無い。目が離せない。心拍が上がる。苦しい。じっとしていると、何もかも苦しくてたまらない。この痛みを無くす術を知っている。

「っ…あ！…っは、…なア、はや…くっ…」

四つん這いで足を左右に開いた雌の姿勢で、えもいわれぬ弧を描く腰の線。スカートの下、受け入れる場所は熱く湿って蠢いているのが分かる。あの場所に楔を打ち込めば、この苦痛から解放されるだろうことも。

「……」

歯を食いしばるが、背が震える。もう無理かもしれない。感覚を失った手は、銃を握っているのか？ 離しているのか？ 温度も硬度も分からない。銃を握る手で、人を殺す手で、血に染まる手で、今から僕は彼を抱く。

眩暈がした。まるで悪夢だ。正気でなんていられない。

「アアッ……！ あ、キモチい……、もっと、ア、かん……っで……！」

気がつけば、彼を組み敷きその首を吸っていた。首の後ろ。太い頸動脈の血流に押し付けた唇の隙間から立てそうになる歯を抑え抑え抑える。彼の背中に接した腹部がざわめき、足でもどかしく布を割る。汗ばんだ臀部と、汗ではない液体に濡れた会陰。狭間で前後に陰茎を抜く。ぬるぬるした愛液が潤滑剤となりアルファの亀頭である露出部を覆い、濡れそぼった窄まりが挿入の予感でじゅくじゅく蠢いた。

「う……あア！ ハヤク……っ！ んアっ！……っあ、……アアア！」

僕の性器が、他の人間と形状が違うと気付いたのは小学生の時。トイレやプールの着替えて、どうして他の子は先が膨らんでいるのだろうと思った。図書室で調べたらすぐに分かった。人の身体の仕組みを解説した図鑑。その終わりの一頁の端っこに、アルファとオメガの繁殖について簡単極まりない説明が。

『番は狼と同じ性交を行う』

獣と同じと。そう書いてあった。

アルファなんて誰も知らない。堂々としていると、意外と誰も気づかない。オメガなど周囲にいない。だって、絶滅危惧種と言われるくらい希少なんだから。僕は自分がアルファだという自覚も持たないまま、また、オメガが存在するかもしれないと想像することもないまま、成長した。自分は理性的な人間だと自覚していた。ずっと。思考や判断。認識。そういうものが、自分でコントロールできなくなる日が来るとは思わなかった。自分は動物に過ぎないのだと知った。オメガの放つ誘引フェロモンは、変えてしまふ。最も弱い部分を。

「っは…あ！んんっ…ふ、あ、ア…！」

気が触れたようにばたつく手足。手を手で、足を足で押さえ込む。背後から覆いかぶさる。背の骨の凹凸。肩甲骨の出っ張り。汗で光る首。月明かりを反射するペンダントの銀の鎖。寝床に押し付けた手首の細さ。足首の無力にすぎぬ抵抗。今まさに犯されるオメガの淫靡な狂態に対して、純粹に欲望だけを抱くことができればどれほど楽か。

「アアッ…！！はやく…っ、なに、して…っ！」

腰が激しく揺れ肛門が亀頭の場所を無闇矢鱈に探る。オメガの性器が、穿つものを欲して蠢く。受け入れる準備が完璧に整ったしとどに濡れるその入り口。カウパーに濡れた先はあっけなくその中に飲み込まれ、硬く充血したそれを締め付ける内部の快感にすぐにも達してしまいそうになる。隔たりがないままの交合であれば、オメガは高い確率で受精する。スキンを装着するため引き抜こうと腰を戻すが、言語を為さない喘ぎの

文句と腸壁の痙攣が後退を留め奥へと誘う。

「っ…いや！はあっ…！あ、もっと！」

「っ…、だめ…っ、外に出さして」

手首を開放し、腰を掴んでペニスを引き抜こうとした。後ろ手に両腕が伸びてきて、強い力で左右の手首を握られる。熱い手の平と、どこにこんな力があつたのか、と思う指の先。

「アアッ…！ア、ア、う…！ナカっ…だ、だして…ッ！」

違う違う。そうじゃない。振り返った横顔は汗と涙と涎にまみれて、肌に張り付いた髪の毛の一本一本が見える。肩越しに振り向く髪の毛の隙間から見える目は、情欲に溶かされ理性の残り香も見えない。しかし焦点ははっきりと結ばれ僕の右目を射抜いている。

「ハア…ッ！ハアッ、ハアッ、…アア…ア…ッ！！」

獣の瞳と、無防備に白い項。そこに残る、噛み痕とも言えぬ一点の桃色。荒い呼吸の合間に唾を何度もごくりと飲み込む。亀頭球を収めることだけは堪え、抽搐を繰り返す。スレインの手がぎりぎりとの僕の手首を握り締める。きつと手痣がついている。

「ハア…ん！ア、ア、アア!!」

性器からのダイレクトな快感も情交の興奮も、しかしどこか散漫だ。それはお互い同じのはず。もっとずっと焦がれるのは、動物としての生存本能。種の保存。求めて止まぬ番というもの。汗の伝う白いうなじ。味は知っている。肌の柔さも。唇で、手で、指

で、何度も触れた。噛みつき肉を食い破り、脊椎の寸前甘いに違いないであろう血を啜り、唾液を落として体を作りかえようというこの衝動。理性とせめぎ合うアルファの支配欲。

ここを、噛みたい。噛んでしまいたい。

「うあ、ア…、アン…！ッハ、ハ、ハ…ッ、ハア…ッ！！」

反る背。首がそこに。髪が香る。うなじが誘う。噛め、噛めと。捕食のような愛撫をねだる。目に入る、産毛の繊細さ。肌の白さ。静脈の青さ。そして薄紅。前歯の後。脊椎に程遠い表層部に、微かに食い込んだに過ぎぬ一欠の歯型。その赤い点が問いかける。お前は噛むか、と。本能のままにオメガの肉体を作り変えるか、と。それは本当に愛なのか、と。

「…あ、あ、アアッ…！っ…、い、いな、ほ…っ！」

嬌声に交じってほとんど聞き取れないくらい、でも確かに、彼は僕の名前を呼んだ。交錯した瞳の色は冬の湖面のように冷えて静かだ。

「かん、で」

猛る。真っ白になる。視界も、思考も、何もかも。

うなじが。白。花びら？歯形。

「いなほ」

声。

「…っく！」

ずる、り。

「う、…あ！！」

「…っ！ふ、っは、…ハ、…ハア、ハア」

ぼたぼたぼたぼた、ぼた、ぼた、びゅ、ぼた、ぼた、ぼた。

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

腹まで捲り上げた黒いスカート。剥き出しの尻の上に放出した白濁。それを空々しい心地で見下ろす。射精は出し尽くすまで止まらない。締め付けるものがないまま、外気の寒さに直に触れ、小刻みな痙攣と脈動を繰り返しそそり立つアルファの性器。自分の身体を、途方に暮れて他人事のように見下ろす。

「だしてって、いったのに…」

ぐったりと右側の頬を床にへばり付かせたままスレインが言った。今更、その顔の下にある布地の色が濃紺だと気付く。巢の材料はこれしかない。血と硝煙の染みついた軍服しか。

呼吸音だけ。それも次第に収まり、しんと静止した。時までも止まったようだ。それでも肉体は循環と放出を続ける。くたびれて尻もちをつき、ふと窓を見た。差し込む青白い光。風と鳥の鳴く音。もう朝だ。

スレインがむくりと体を起こした。足を折り曲げて座り、がしがし後頭部を搔いて気

まずそうに視線を壁の継ぎ目にさ迷わせた。黒々とした黴と煤。赤い布地の上で、膝頭が触れそうな距離で向かい合っている。

「…なあ」

声は掠れている。

「…なに？」

彼も、僕も。

スレインが壁から視線を外し、頭を垂れて足の間を凝視した。そこには、巢を巢たらしめるアルファの私物。

「なぜだ？」

鋭角に開いた足の間。よれよれの軍服の後ろ身ごろに、彼の掌が乗った。

「何が？」

その掌は何かを潰すように握られた。手の甲の筋に血管が浮かぶ。俯く彼の目は一点を凝視している。

「うなじを噛まず、射精は最初の一度きり。スキンを着けて、外に出して。なぜだ？ 苦しいだけだ。お互いに」

左右を彷徨い、ぎこちなく合わさる視線。眩しそうに目を細め、眉間と目尻に皺を寄せて彼は言う。

「お前は、僕をどうしたいんだ？」

ずっとそれが聞きたかった、とスレインは言った。

灰色の壁。小さな窓。煤と埃と黴。出入り口は一つだけ。この場所は牢獄に似ている。

「どうもしない」

スレインは癩癧を起こす子どものように床を叩いた。

「…っ、お前は！……お前、は。…僕は、お前が…」

言葉にならないのか、彼はそのまま肘を折り床に頭を押し付け何かを耐えるようにじっと身を竦ませている。

「スレイン…」

呻き声。泣いているのかもしれないと思った。しかし僕を睨む目は完全に乾いて、頬は陸に横たわる水死体のように蒼白だ。

「…お前は、…僕をどうしたい？番じゃない。もはや敵でもない。僕はどうしたらいいんだ？お前がアルファだから。僕はオメガだから。それ以外に、お前の愛撫をどう理解したらいい？お前の、その腕の歯型」

噛み締め擦る歯の音さえ聞こえる。

「なぜだ？うなじを噛めばいい。その方が今よりずっといい。どうしてお前は僕の肉ではなく自身の肉を喰い破る？馬鹿じゃないのか。大馬鹿だ」

右腕の前膊が唐突に痛み出す。彼のうなじの替わりに噛みついた腕の歯痕。この歯の数、欲望の数だ。理性など無力だ。ごまかしなど無駄だ。それでも、文字通り首の皮

一枚で、僕は彼をまだ損なっていないはずだ。

「痛いだろう、噛み傷は。内側から肉を抉られ血が溜まり、傷に喰らわれているようだろう」

オメガとして、被虐者として、彼は知っている。噛むという行為のもたらす痛みについて。

「僕は君を傷つけたくはない。そして、なにも強制したくない」

狂人のような笑い声が廃墟に木霊する。

「アルファのお前がそれを言うのか？僕を組み敷き足を割り、直腸をさんざんに犯して確かに恍惚を感じていたはずのお前が。どの口でそれを言う？」

気圧される。正論とやり場のない感情の吐露に。

「…オメガだから、という理由で、僕は君とここに在るわけじゃない」

「詭弁だ」

そう聞こえたに違いない。それは分かる。でも、噛んだら終わりだ。これを、どう言葉にして伝えられるって言うんだ。

スレインは軽蔑を含んだ嘲笑の後、唐突に真顔になり口をほとんど動かさず発声した。

「それなら聞くが、他にどんな理由があるって言うんだ」

冷え冷えと冴える思考。それと裏腹にいまだ続く下腹部の放出。しかし扱う気にもなれず、問いの答えに言葉を巡らせていると、スレインが動いた。僕の右目に焦点を合わ

せたまま、腰を折り頭部を降下させた先には怒張し白濁を溢すアルファ特有の形。顔がそこに近づきそして。

べろり。赤い舌先が先端の滴りを掬い取った。

「っ…！ちょ、ちょっと」

ゴクン。

「…………ふ」

舌なめずり。蒼白な顔の中、青褪めた唇から覗く舌だけが赤い。まだ膨らみが収まらない亀頭球を彼の両手の指が揉んだ。

「出せば良かったんだ」

はくりと口に肉棒の中ほどまでを含まれる。カリの無い先端、尿道を舌がぐりぐり開く。

「それ…は…っあ！っふ…」

ずぶずぶ音を立てる口淫。射精中の愛撫は気絶するほどの痺れが全身を駆け巡る。

「っは、あ…！…っく、…ん、んっ」

口の中は熱くてぬめぬめして、バカになるくらい気持ちいい。上顎と咽喉に先端を扱かれ頬肉が竿を締め付ける。快感にびゅくびゅく音を立てる白濁の吐き出される先は。

ゴクン。

ゴクン。ゴクン。

白い喉が鳴る。彼の体内に飲み下されていく。揉みしだかれ絞られる龟头球から射精され、彼の胃酸で死滅する精子を想像し、胃の中が逆流するような不快感に口を押える。

じゅぶじゅぶじゅぶ、ゴク。じゅ、じゅ、ゴク。

やめてくれ。まだ体内で燻る熱が、絞られ、吸い取られ、そして飲み下される。口腔を泳ぎ、食道を通過し、胃へと到達する六〇マイクロメートルの細胞。鞭毛を振動させる数億が。

死滅する。

「……う、……っ」

気持ちが悪い。

引きはがそうと股座の頭に手を伸ばす。頭髮に微かに触れただけで、彼はあっさり身を引いた。

「……はあ、つく、……う」

寒気。放出は続いている。気持ち悪い。気持ち悪い。なんだこれ。いっそ引きちぎってしまいたい。

「……ふ、……は、……はは」

空虚な声。壊れた人形のように首を傾げ、この上なく醜悪で痛々しい笑い顔が僕を見る。

「お前の精子は死んだ。殺した。僕はお前の子種を飲んで殺す」

どうして。ああ、まともに何も考えられない。頭が割れるように痛い。心臓が別の生き物のように大きく跳ねる。胸を抑え、顔を上げ、彼の顔にただ見入る。歪む口角と蒼白の頬。眼球の充血した白目。高い場所から落とされたビー玉の内部、触れられない輝のようなその瞳の翳りに。

「憎いか？おぞましいか？恐ろしいか？オメガが。いや、僕が。お前に全てを捨てさせ、お前を変えた。こんなところで淫蕩に耽るのはお前が僕に手を伸ばしたからだ」

囁く唇を濡らす精液の粘り。

「お前は、僕をどうしたい？」

手が伸びる。意思によらず、僕の両手がそろりと向かう先にある。白い喉首。上下する喉仏。震える声帯。

目は目を見たまま。乱反射する瞳の虹彩に僕が映り込む。そして。

「殺したいとは、思わないか？」

転回する視界。掴みかかった首の背後が壁から床に。あらゆるものを出し切り汚れにまみれた巢の上で、先に両手を相手の首にかけたのはどちらなのか。

「……ア、……ア！」

首は柔く、骨は折れそうに脆い。

「……ッ………！！！」

足を蹴飛ばされ、上下の身体が入れ替わる。視界に天井が映り込む。僕よりずっと軽い体重。それを押しのけることができない。死にそんな身体の、どこにこんな力があつたのか。

「……ア……っ、……ア！」

長く尾を引く喉笛。眼球が膜を張る。歪む反射。止まる呼吸。親指の脈動。平行に伸びた四本の腕の格子。

三つの視線が交差し、

呼吸の止まった二つの口は開ききり、

歪む頬に一筋の線。

消えるのは言葉。

表れるのは瞳の奥。

頬を濡らすそれは涙か？憎悪？絶望？後悔？それとも。

どうしてそんな顔をするんだ。殺したいんじゃないのか、僕を。

『……ああ。チェスには飽きた』

——違う。

「ゲホッ……カッ……！ハ、ハッ……、ハアッ……！」

先に手を離れたのはスレイン。次に僕。隙について突き飛ばす。彼はごろごろ巣の外に転がり出た。

「ハァ…、ハァ…、ハァ…」

スレインは床の上でびくともしない。今起こったこと、今しようとしたことを思うと何も言えない。何もできない。あやうく殺すところだった。どちらが死んでも不思議じゃなかった。静止はスレインが身動ぎして動き出す。うつ伏せに転がっていた彼は、重そうに体を仰向けに返した。

凶暴な西日。さっきまで、いつだったか。そして、いまはいつだ。

手がまだ震えている。

「…あのまま、殺せばよかったのに」

スレインは無表情に天井を見上げそう言った。

体を起こして両手で支えて、酸素を取り込み首を振る。違う違う。そうじゃない。

もし噛んでしまったら、永久に失われる。僕が先に死んだら、スレインはどうなる。

その未来が無いなんて、とても言えない。今だって、こんなぎりぎりの生き方で二人で肩を寄せ合って、死は極秘施設にいた時よりずっと傍までにじり寄っている。それでも逃げずにはいられなかった。僕がいない間に、他の誰かに項を噛まれ体を作り変えられ、そして知らない誰かの子を宿す可能性を想像した瞬間、手が伸びた。そして彼は僕の手を取った。

「…スレイン」

彼は僕を見ることなく目を閉じた。返事もない。

「…スレイン。僕は君を殺したい」

もし君が死ぬなら、誰かではなく僕の手で。

「でも、それ以上に、君に生きて欲しいと思うんだ」

殺される以外の未来があるのならば、だが。

「生きてよ。僕も、生きるから」

生きて欲しい。笑ってほしい。たとえ僕がいなくても。

かぶり。

背筋を電流のように駆け抜けた甘美なあの感触は、間違いなく快感と呼ばれるものだったろう。幼い僕にはそれが何か分からなくて、それをもたらしただ人物の顔を見つめ目を白黒するばかりだった。

「…あ、な、にか？」

みっともなく裏返った声でそう聞くと、彼女も目を丸くして、小さく口を開いて僕を見ていた。しばらく待つと首を振り、長いカナリアイエローの金糸が膨らみ、肩の飾りのサテンリボンがしゃらりと滑り影を揺らした。

「…ごめんなさい。どうしてかしら」

十一歳のアセイラム姫は、咲き初めの花びらの色形をした唇に自身の指で触れた。

あの美しい唇が、さっき僕のうなじに触れた。ふっくらとした、つややかな彼女の唇。

「とても、おいしそうに見えて」

かあ、と彼女の頬が薔薇色に染まった。はしたないことをした、と先ほどの行いを恥じらっているのだろう。愛らしい表情と仕草を靴二つ分の距離で見つめ、僕は冷たい汗

を背中にかいた。

まるで。

「つい、かみついてしまったの」

鈴の転がるような声に、こめかみから一筋の汗が伝う。そう。そうなのだ。彼女は喰らう側。僕は、喰われる側。さっき、彼女の小さな歯の接触を皮膚が予感し、寸前に迫る牙を瞳孔に収めた捕食動物の心地で僕はそれを受け入れた。噛まれ、飲み込まれ、消化され、彼女の血肉となり、僕の意味は消え、彼女の一部として彼女の命を形作る細胞の一片。

好きな人に対して、誰しも感じることなのだろうか。僕は変なのかな。

「僕はおいしくないですよ」

そうは言いつつ、彼女になら、皮膚を剥がされ肉を噛まれ、骨を碎かれ骨髓を啜られたとしても。それも悪くもないなと思ってしまう。ずっと一緒だ。彼女の美しい肉体の糧となり、彼女の瞳を通して世界に触れる。きっと、僕が見ている世界とは色も形も人の心も何もかもが違うだろう。そんな世界を見てみたい。伸びて切る爪、切る髪も、時に零れる涙の一雫にも、その中に僕の一部が存在を許されるなら。

融合への希求。

心の中で首を振る。

誰かに言ったら、気色悪いと殴られるかもしれない。

薄桃のスカートが膨らんだ。アセイラム姫は通路の真ん中で軽やかにターンして、天使のように笑った。

「お茶にしましょう。甘いお菓子があります」

手を引かれ、長い髪に覆われた背を追う。柔らかな手。あたたかい。爪だけが薄く固く、胸がざわめく。彼女のその背に翼があっても僕は驚かない。

けれど。

「スレインは、チョコレートは好きですか？」

「…はい」

翼の色が白とは限らない、と。この日僕はそう思った。

月の姫君にこの話をしたら、きっとこう言うだろう。

「お姉さまに、搾取されるものの心を分かりはしないのよ。そして、搾取されることを幸せだと信じているの」

僕もそう思う。しかし、彼女の一部になれるのなら、喰われてしまっても思うのだ。

波の音。僕は思う。

これは夢だ。だって、何が起るか知っている。今まで、何度も夢の中で立った場所。

冬の海。触れたくない暗色の冷たい波。じめじめした浜辺。風で目に痛い砂の粒。

半ズボンで、ダウンジャケットを羽織っている僕は八歳だ。いや、だった。陰鬱な浜辺で、空の色だけが絵筆で塗りつぶされたように鮮やかに青い。寂しさを集めて混ぜて絵にしたら、きつとこんなだろう。

ポケットを叩く。ある。半ズボンの右のポケットの中に、僕が見つけて拾ったもの。これは穴ぼこだらけの小さな小石。穴が無数に空いていて、いくつかは貫通してトンネルのように向こう側の景色が覗ける。薄い灰色で、大きさは握ると少しはみ出るくらい。楕円に近い歪な形は小動物の心臓のようだ。

夢の中で、僕は歩く。しゃり。しゃり。貝、サンゴ、海を棲み処とする生き物の死骸の果て。砂の感触をスニーカーの足裏に感じ、吹く風に交じる砂粒の叫びを頬に受け止め、髪を潮風に晒し、僕が辿るのは波打ち際の色の線。波に濡れた場所と渴いて砂の舞い上がる場所。色の境目に、綱渡りのように慎重に足を進める。横断歩道の白線のように

に、自分のエリアを歩く遊びをする。

寒い海風。蒼い冬空。砂の上に僕ひとり。ユキ姉と一緒にだったはずなのに、この夢の海には何度来ても僕しかない。

ポケットをまた叩く。良かった。まだある。僕が見つけた不思議な小石。家まで持って帰ろう。そう思うのだけれど。

プ————……。ボタン。

停車のベル。扉の開閉。発車音。

気づけばバスの中。眠っていたらしく、口の中が渴いていた。これは夢の中だから、喉なんて渴くわけがないのに。おかしいな。

座席の隣にはユキ姉。見上げた顔は目を閉じて眠っている。明るくて、元気で、大らかと言うか大雑把で、料理も掃除もからきしで。朝寝坊だし、何年たってもごみの日だつて覚えられない。自分より年下の姉の寝顔を見るのは変な感じだ。中学生で、前髪が今より短くて、ジーンズのスカートから伸びる膝小僧が赤い。子どもだ。この人が、ずっと僕を守ってくれた。

バスの気怠い振動。結末を知っている夢はいいのかな。悪いのかな。どちらにせよ、僕は必ずここでポケットを触る。狭い座席に座ったまま、服の上から確かめる。冬の海で拾った、あの小石。
無いんだ。

石が無い。夢だと俯瞰し、思い出は唯一の解を示すのに。諦め悪く僕はポケットを何度も叩いて、手を入れて、裏返して、尻ポケットもジャケットのポケットも全部確かめて、そうして窓の外を見る。ユキ姉の横顔の向こう。結露して曇った窓ガラスの外には破壊の跡が残る住宅街。海はもう遠い。戻れない。それに、誰にも言えない。どこで無くしてしまったんだろう。

物を無くすなんて、らしくない。拾った小石。綺麗なわけではない。大人なら、気にも留めない拾い物。だから言えない。でも、きつと世界に一つしかない。そう思う。持つて帰って、どうしたかったわけでもない。ただ、穴の中に白いものがあつた。それが僕には翼の形に見えたから。

誰かに聞いてみたかった。これは何だと思う？って。

夕焼け前は、黄色が世界を染めるんだ。

黄と白だけになった視界。差し込む光の先は心象風景のように窓枠の十字の影を壁の一面に張り付け、埃を被った十字架は重く濃い影を墓標のように床に伸ばす。

夢から戻ってきた。こっちが現実。しかし、冬の海の灰色も廃墟教会の黄色も大して変わらない。どちらが夢であっても構わないのではないだろうか。

馬鹿なことを考えた。

呼吸を意識する。そして気付く。空気が違う。あれほど強烈だった、腐りかけの果実めく甘い毒のような香り。瑞々しい青いレモンのような苦さと酸っぱさが微かに漂っているだけ。

退廃的な光景を眺めているうちに、自身の肉体の変化に気付く。この数日、肉体と精神を苛んだ暴力的なまでの欲情の気配が過ぎ去り、脳内に立ち込めていた霧が晴れ渡ったかのように淀みなく思考が展開する。

伊奈帆は肘をついて頭を起こした。眩暈に襲われたが、すぐに収まる。冷気が毛布と敷物の間の隙間から入り込み、冷気の侵入を阻止するためごわつく布地を集め抱く。

嵐の過ぎ去った後のような室内だ。ここ数日お互いの身体に夢中で気づかなかったが、埃っぽいし、饅えた臭いが目に滲みる。ごみだらけで、雑然と散らかった薬缶やらカップやら、救急セットは蓋が開いて包帯が転がっている。

ぱりぱりに乾いたシャツの表面の光沢。床の斑。色で、その乾いてこびりついた液体が何であるか分かる。そう言えば、今は何も着ていない。いつ脱いだのかも覚えていない。ちらりと視線を隣に落とすと、同衾者の肩も素肌であった。

小窓から差し込む光に、宙に浮く埃がきらきら光る。

薄汚くて、埃っぽい、黴臭くて底冷えのする廃教会の屋根裏部屋。それでも、僕らの最初の巣であることに変わりはない。気温に根負けして頭まで布の境目に潜り込む。湿った人肌の温度。息をすると汗と脂の饅えた臭いがする。それがしかし、嫌ではない。

ヒートが終わったらしい。

「…伊奈帆」

毎日一緒にいたのに、こんな声だったか、と思う。

「ああ、起きた？調子は？」

スレインはぼつの悪い顔で口を斜めにした。憑き物が落ちたような表情だ。

「…大丈夫。久しぶりに、人の心地がするよ」

異常な状況で冷静じゃなかったし、混乱していたんだな、と改めて理解した。ヒートは終わった。こんなに近くで密着していても、性の本能は意識の底で静かに沈殿してい

る。

首を絞め、泣き、眠った。

昨日のことは、夢のように遠い。お互い正気ではなかった。今は精飲くらいで何を、と思う。ヒートの終盤、体力も気力も使い果たして、相当参っていたのかもしれない。今は嘘のように思考が晴れて、過去の行動を冷静に分析できる。

アルファとか、オメガとか。考えすぎなんだ、お互い。

しかし、現実だ。殺しかけたことも、殺し損ねたことも。

「今、いつだ？」

「極秘施設から八日目。の、夕方」

小窓から差し込む光はいつの間にか赤い。窓枠のクロスが形作る影は、床と巢の上を縦断する。断罪の十字架のようだ。

「…なあ」

スレインの声。

「何？」

澄んだ瞳の色だった。

「…どうして噛まないんだ？」

首の一歯が脳裏によぎる。

「…三回目だね。それ」

「ちゃんと答えろ。僕は、どうせ噛まれるならお前がいい」

言葉だけなら、愛の告白のような台詞だというのに、声と表情は、自殺者の遺言のよう。

「僕は嫌だよ」

スレインは腰から上の半身を起こした。素肌の上の鬱血の数と残る傷跡を見上げ辿り、臍の窪みで視線が留まる。その皮膚の下に臓器が満ちて。

「どうして。噛みたいだろう。うまそうに見えるだろう。こんな、みすばらしい首でも」
この臍の下。僕とは異なる体のつくりをする真っ平で薄い腹の下の内臓。そこにはオメガのオメガたる器官が。子宮がある。子宮が命じる。番を成せと。うなじを差し出せと。

「お前の右腕。噛みたいだろう。どうして耐える？ そんなになつてまで」

スレインの目は、起き上がろうと手をつき肘を伸ばした僕の右腕。瘡蓋の点が無数に浮き上がる肌。表層部分の鈍い痛みには慣れた。知っているのは気付いていたが、隠しても仕方がないし、そんな余裕は無かったから。

「噛め。お前のものにしろ。お前にとって、ただ一度のことではないのだから」

泣きそうな顔で懇願するのは、それが楽だから。投げやりで意思も宿命も放棄した破壊者の思考だ。

「飽きたら、別の番が欲しくなったら、乗り換えろ。決して恨んだりはいしない。オメガはアルファの支配を受け入れる。これまで、僕が地球人として火星人の支配を拒まなかったように」

アルファは、番を乗り換えることができる。そんな使い捨ての繁殖を、彼は望むという。オメガにとって、番になるということはアルファの一部になることだ。

「それか、今ここに捨て置けばいい。フェロモンの残り香に中てられて、誰かが僕のうなじを噛む。それでもいい」

ベータに噛まれたオメガは、決して満たされぬ渴きを生涯抱えて生きるだろう。それでもいい、と彼は言う。

「伊奈帆。お願いだから。頼むから。もう、壊してほしい。こんな身体も、こんな心も」歪む口、暗い目に不幸の深さを思い知る。

悲愴に歪むその顔を見ているうちに、どうして僕らは死ななかつたのだろうか、と思う。何度も死にかけた。いろいろなものを失い、損ない、傷つけ、奪い、細い運命の糸の上を綱渡りしてここまで来た。計算だけではない。衝動だけではない。宿命だけではない。感情だけではない。

死からは、決して逃れることができないと知った。生は、一瞬で消えると知った。

固く閉じた瞼の裏側に広がる光景。初めて目にした火星のカタフラクト。崩れ行く街並み。宙に浮く、制服姿の生身の身体。友だち。彼は僕を見て名前を呼んだ。起助は、

僕の大切なものを守ろうとして。そして死へ近づき、死に飲まれた。掴んだ手を離してしまったあの時。知っていたつもりだった。分かっていたつもりだった。そして、自分もそうだと思い込んでいた。死んだら、もう戻らないと。でも、それは理解以上に想像以上にあっけなく。前触れもなく、痕跡もなく。

人は、人に殺される。人は、時間に殺される。人は、世界の理に殺される。

「もし、僕が死んだら」

僕もそう。そして彼も。

次に死ぬのが自分ではない、そんな保証はどこにもない。予感すらなく人は死ぬ。なら、生きているうちに伝えたい。

「…君より先に僕が死んだら」

僕の言葉の続きを、スレインはじっと待っている。

頭の中を言葉にするのは簡単だ。けれど、心の中を言葉にするのは、どうしてこんなに難しいんだろう。本当に伝えたいことは、いつだっとうまく言えない。

「僕が死んだら君が死ぬとか。…たとえ生きていても、君がもう二度と笑わなくなつて、言葉も忘れて。産んだ子どもの名前も呼べないくらい壊れてしまふとか」

番を失ったオメガは、二度と番を作れない。死よりも辛い性交を強いられ、自我も無くして子どもを産み出す。管理され、飼育される。人間なのに。感情だって、大切な思い出であるのに。

「そういうことを考えると、君と番になるのは嫌だ」

僕らは人間なんだ。アルファでも、オメガでも、大量殺戮の人殺しでも。僕は生きている。スレインは生きている。まだ、生きていたい。たとえ、世界に居場所を失っても。「僕がいなくなっても、君には生きてほしい。できれば笑ってほしい。未来に望みがあったほしい。一人でも、幸せになろうとしてほしい」

小窓から差し込む光が暴く部屋の惨状は、その願いの過程だ。汚れて破れて、寒くて臭い、傷だらけで、血や体液にまみれて、明日食べる物もなく、行く当てさえもない。それでも僕らは今生きて、話ができる。未来の話を。

「君が先に死んでも、僕は生きる。他の誰かを好きになるかもしれないし、番って、子どもを育てるかもしれない。死ぬ時に家族がいて、案外いい人生になったと笑う日が来るかもしれない」

遠い想像の話。でも、その未来が無いとは、誰にも言いきれない。僕らが今こうして肩を寄せ合い逃亡している現在など、ノヴォスタリスクで銃を向けた時には想像もできなかったことから。ならば、思い描くことは自由だ。どんな未来も、まだ決定していない。

「僕は、君にもそうであってほしいんだ」

一人で生きて、一人で死ぬ。しかし、できるだけ君の近くで息をしたい。呼吸が止まるまで。心臓が止まるまで。

「僕は君と一緒に生きたいと思うけれど、君と一緒に死にたいとは思わない」
共に生き、別に死ぬ。僕らにはそれが望ましい。

日は沈み、影の十字架は闇に輪郭を曖昧にする。僕らは暗い部屋の中、目を見て見られ、互いの色を、その目が見てきたあらゆるものを、奥深くに閉じ込めた思いを読み解こうとする。

「…そうか」

長い沈黙の後、スレインが呟いた。そして立ち上がり服を拾い上げ頭から被る。暗い室内に黒い修道服が溶け込んで、顔と手。そして素足だけが白く浮かび上がった。殉教者の亡霊のようでもあり、聖母の絵画のようでもあった。

「スレイン？」

「お前の話は分かった」

少し足を引き摺って、スレインは部屋の隅に向かう。先には階下への階段。

「待って、どこ行くの？」

振り向いた。感情の読み取れない無表情。

死ぬ気ではないだろうか。

「下に。なんとなく、星が見たくて」

紺碧は遠く、茜はほのか。群青の闇中、窓にはらりと白く落ちるのは。

「雪が降ってるよ」

「だからさ」

唇が歪んで齒が覗く。目はこんなに暗い部屋の中でも眩しそうに細まって、頬に窪みが。僕には、彼が笑ったように見えた。そうだといひ。

「僕も行くよ」

銃弾で穴の開いた扉から、彼に続いて血糊の乾いた階段を降りゆく。

礼拝堂は雪に覆われていた。

六花の欠片を金糸に纏い、薄汚れた黒い尼僧服の裾から伸びるあかぎれた素足が雪を踏む。残した足跡を欠けた月が青く照らした。

「寒いね」

小声で言うと、スレインは薄く笑った。

「ああ」

右手の小指で彼の左手の小指を触る。お互い悴んでいて、体温は分からない。

「僕は、ずっと自分を殺したかった」

スレインが言う。独白めいた、自然な声音だった。

「心を何度も殺された。折られて砕かれて、磨り潰されて。そのうち、自分で心を殺すようになった」

僕らが出会うまで、それぞれにあったこと。決して共有されない自身の一部。彼のかつての境遇を文書で読んで知っている。しかし、それは知っているだけで、理解ではないのだ。

「人以下の扱いを受けても、それでも僕はまだ自分を人だと思っていた」

雪が世界の色彩を薄くする。床も、絨毯も、椅子も、祭壇も、マリアの像も。ステンドグラスは古ぼけた絵画のようだ。今、ここにいるのは二人だけ。

「オメガだと知った時、僕は人ですらなかったんだと思った」

水彩画の灰白に鮮やかな黒衣雪より冷えた赤い素足。痛みにも、寒さにも、底知れぬ悦楽の恐怖にも、この素足は汚せない。

「だから、どうでも良くなった。生きるとか、死ぬとか。僕にとっては、確かなことは今この瞬間しかない。見えない未来。保障のない未来。けれど、お前は、僕を助けた」顔をはっきりと向けて、スレインは僕を見つめた。作り物めいた、感情のない真顔。

「あの海岸から面会室まで。僕が、どれだけお前を恨んだか分かるか」

大気圏の先の大気の下。潮風に髪を逆立て人差し指がこめかみを叩いたあの時の、安らかとも言える笑みを思い出す。

「今なら分かる」

「処刑の日取りも分からない中、格子の向こうの輝かしい朝日に絶望を感じてただ待った。お前が来るのを」

きつと殺してくれると思って、とスレインは足を止めた。

「お前は僕に言った。生きるんだ、と。そして姫様の言葉を聞いて、僕はもう、どこにも逃げられないことを悟った。過去へも、死へも、正気の外へも」

スレインが天を仰ぎ、伊奈帆も見上げた。天井の隙間、雲の切れ間に星が川を作って

いる。

「界塚伊奈帆」

「うん」

お互いに、いつしか名前を知っていた。彼は誰から聞いたのだろう。僕の名を。

「役目は終わったはずなのに、何度もお前は会いに来た。僕はずっと不思議だった」
面会室でのチェス。何よりも雄弁なのはその駒の配置と見据える瞳。

「かつては敵で、殺し合った。同じ一人の人を大切に想っていたはずなのに。最初は、惨めな僕を笑いに来たとそう思った」

初めて扉を開けた時、僕を認識して微かに動いた彼の首。

「でも、お前の表情には勝者の恍惚も敗者への侮蔑もなかった。ただ、右目が静かに僕をじっと見つめていた」

その右目、と彼は聞いた。覚えている。

「僕をそんな風に見る人間はいなかった。知らない。お前の目は僕の何を見ているのか。チェスをして、取り留めのない話をして、まるで友人を訪ねるようにお前は僕に会いに来た」

雨に濡れて踏み込んだ面会室。彼は知らない。僕が扉の前で大きく息を吸いこんで、気圧されぬよう足を踏みこんだと。そのくらい緊張していた。彼と正対することに。

「ヒートがきた。ああ、これで終わると思った」

狂態を映す監視カメラ。

「それでもお前は会いに来た」

張り詰めた空気の中、形式をなぞるように続けた三ヶ月間の面会。

「僕がオメガだから会いに来るんだと自分に言い聞かせた」

日に日に痩せる身体と、戸惑いを浮かべる目と口元。

「手を掴んだのは、お前がアルファだからで」

床に落ちて散らばるチェス盤。

「人を殺したのは、番になるためで」

フロントガラスにめり込んだ、脳漿に濡れた銃弾。

「セックスするのは、繁殖のためだと」

粗末な巢の上、狼のように交合した数日のこと。

「そうやって自分を納得させて、僕はお前とここにいた。お前の上着を掻き抱いて」

眠る彼の腕の中でくしゃくしゃになった、体液に変色した軍服。

語る彼の足先は雪に沈む、

「でも、お前はそうじゃなかったんだな。アルファとかオメガとか、そういう本能をお前は受け入れているが、支配されたくはないと考えている。自分の意思に基づき生きると、それができると信じ、体現しようとしている。さっき、それが分かった」

教会の天井は高い。崩れた場所から、もっと高い空が見える。星明かりに雪の花。降

る雪を手に乗せ、降る雪を踏む。人は飛べなかった。飛ぶ鳥の翼に焦がれ、求め、大気の底で息をする。陸に憧憬を抱く人魚の泡のように、僕らは互いの吐き出した息を吸いこみ窒息しそうな呼吸を繋ぐ。

「伊奈帆」

密やかな声は懺悔室の聖職者のように。

「何？」

夜の色に染まり天を突くオルガンのパイプ。あの先から、音を奏で天へと人は問いかけた。

「僕は人だろうか」

「うん」

人の罪を。

「お前は人だろうか」

「うん」

人の罰を。

「お前と僕は、生きていいのだろうか」

人の業を。

答えのない問いかけ。罪も罰も業も、背負っていくには重すぎる。誰かを殺すと死にたくなる。誰かを騙すと泣きたくなる。血も罪も知らず、何も知らずに、何もできずに

いられたら。でも、僕はこう思う。

「うん。僕らは人で、僕は君が好きだよ」

僕らが何をしてきたとしても、この先何をするにしても。僕らは人だ。そして、僕は人としてスレインが好きだ。それでいいんじゃないだろうか。

「…そうか」

スレインが俯き、胸に手を当て握りしめた。修道服の下には、あのペンダントがある。彼から離れ、彼に戻った記憶の欠片。あの戦争の全てを知っているのは、何も語らぬマリアのロザリオめいた銀のアミュレットだけだ。

スレインは閉じた瞼の裏を見ている。今、彼には何が見えているのだろうか。

「不思議だ」

「何が？」

開いた瞼の中の瞳は、最初地面の白雪を、次に星の瞬きを映した。閉じ込められた碧に散る星と雪の煌き。なんて綺麗なんだろうか。星が雪を飾る。淡く白く、そして光る。

こんな、美しい夜があるなんて。

「もう、こんな話はできないと思っていた。お前と」

「どうして？」

スレインが小さく俯いた。

「いろんなことが、変わってしまったから」

確かに、想像もしていなかった。今ここに二人でいる未来を。色んなことが変わってしまった。立場も、状況も、名前の呼び方も。殺した人の数も。でも、それが生きること。罪も罰も傷も、全て引き受け呼吸する。それだけなんだ。僕らにあるのは。

「でも、変わらないこともある」

「たとえば、どんな？」

僕は触れた小指を指切りのように結んだ。

「君の声とか」

ぶっきらぼうなのにどこか優しい、その声。

「君のその、しかめっ面とか」

眉間の皺と歪んだ口元。無表情よりずっと好きだ。

「調子は？って聞きたくなる危なっかしい感じとか」

細くて、顔色が悪くて、喧々しているのにどこか抜けててほっとけない。

「あと、面白くないけど、身長差とか」

まだ、彼の方が高い。ほんの少しだけ。

「その、ペンダントを握る癖とか」

握りしめた服に寄る放射状の皺の形。その下に確かに動く心臓がある。

「そういうところ」

スレインはしばらくじっと僕の右目を見ていたが、一度左目を見てそして表情を綻ば

せた。

「…変なやつ」

そう。変わらない。その、この世の全ての幸せを手放し安堵したような微笑みも。スレイン・トロイヤードという人間の弱さ、狡さ、汚さ、傷や罪、人並みの幸せなんてほとんどありはしない半生に、たった一つ光がある。僕は他に、こんな悲しい笑顔を知らない。こんな儚い瞳を知らない。こんな魂の在り方を知らない。

振り返る。雪に残る足の数。裸足の足は寒いだろうな。僕は、彼の靴を無くしてしまっただ。きつと今頃、水海の底で魚の住処になっている。裸足の形。軍靴の形。平行線を描いて今ここへ。

雪に残る足跡は冬の砂浜の思い出に似ている。僕は足を踏み出した。しゃり。しゃり。踏む感触は砂浜の砂よりずっと優しい。

「…小さい頃、海に行ったんだ。姉と」

スレインは不思議そうに僕を見た。

「唐突だな…。それで？」

「砂浜に変な石が落ちていた」

「変な石？」

こんな話を他人にするのは初めてだ。ずっと、誰にも言いたくなかった。言ったら、また無くしてしまって、もう見つからないように思えて。

「穴だらけでさ。どうやって穴ができたのか不思議だった。裏返したりぐるぐる回して、そうして穴の奥に、白いものを見つけた。指でつついても出てこなくて、何だろうと思つて。僕はその石をポケットに入れた」

「うん」

「帰る途中で、僕はその石を無くしたことに気付いた」

穴ぼこだらけの歪な小石。拾う人は誰もいない。

「ポケットを叩いても、裏返しても、あの穴だらけの石はなくてさ。引き返すこともできなかったから、そのまま帰った。」

「落としたのか」

「多分ね。それで、次の日図書館に行って調べてみたんだ」

書棚で手に取った、端が擦り切れカバーフィルムでの補修の跡のある図鑑。

「うん」

「あの穴は、カモメガイの巣だった」

「カモメガイ？」

「二枚貝で、石を削って潜り、巣にする」

「それが、穴の正体か」

「そう」

白い二枚貝は、一対のカモメの翼。

「巢穴の貝は、繁殖期に穴から出て海へ向かう」

「うん」

「僕が拾った石の穴には、白い貝殻が残っていたんだと気がついた」

「うん」

「あの、穴の中で生まれて死んだ貝のことをずっと覚えてる」

穴の奥。指が届かず取り出すことのできなかった、翼を畳んだカモメの形。持って帰っても、生き返るわけではないし取り出せたかも分からない。けれど。

「ポケットになんか入れないで、ずっと握り締めていたら。きっと無くさなかった」
あの石を砕いて、空に向かって貝殻を投げることは出来たかもしれない。

「…お前は、何が言いたいんだ？」

スレインの声。何が言いたいかなんて、僕にだって分かりはしない。でも、言えた。今までずっと言わなかったこと。この記憶の一端を共有できる人に会えた。言葉にできない所はきっと全部伝わっている。だから僕は、墓碑の心地で言葉を紡ぐ。これが僕の意思であり、生けるも死ぬもともにあると。

「僕は、君の手を掴んだらう？」

大気圏の炎の色を思い出す。

「…ああ。頼んでないけどな」

「君は、僕の手を掴んだ」

足元に転がるチェスマンをいくつも踏んで走り出した。

「…ああ」

結んでいた小指を解き、手の平と掌を合わせ握る。

「そして、ここにある」

握った手は凍えて固い。それでも、生きた人の肌と肉だ。

「もう無くすのは御免だ。だから、ずっと離さない」

「お前…」

スレインがくすりと笑った。こんな笑い方もできるんだ。

「僕は小石と同じってわけか」

穴の奥の純白の貝殻は、鳥のたたんだ翼なんだ。

「穴の中のカメメガイよりも、もっとずっと大事だよ」

これからの日常。帰る家を失い、行くあてもなく、主を失った廃墟で朝を迎える。道を行き、道なき場所へ足を踏み入れ、世界から逃げるように旅をする。花の丘、砂漠の月。絵画の川。鏡面の海。僕らに翼など無いが、きつと望めば何処へでも行ける。世界の果ての絶景で、地球の美しさをこの目に映す日が来るならば。

そのときは、隣に君がいて欲しい。

いつか、愛は何だろうと言った僕に。君はただ一言、わからないと。そう言ったけれど。

これを、愛と呼ぶのは陳腐だろうか。

尼僧服の肩にはらはら落ちる星屑が彩る雪花。天を仰ぐ横顔の鼻筋と唇の線。瞳に閉じ込めた思い出はプリズム。

悴んだ手。震えは寒さのせいではない。

「…伊奈帆？」

「スレイン」

僕は息を吸った。一度、息を止め口を閉じ、開く。震える。心臓はこんなに熱いの。髪を飾る雪の結晶。この小さな欠片の一つ一つに、同じ形の物はない。小さくて、日の光や人肌に溶けてしまう天の花。消えてなくなるその一片をおしなべ僕らは雪と呼ぶ。雪のように、意味もなく生まれそしてあっけなく死ぬ。求めて止まぬ光の中で、混ざって溶けて蒸発して。何も残さず消えていく。それでいい。でも、一人ではなく。

できれば、二人で。

「結婚しよう」

「…は？」

まん丸く見開いた目とぼかんと間拔けな口。久しぶりに見る、驚いた顔。

「なんで？」

「君が好きだし」

「はあ？好きって…」

「ずっと一緒にいたいしさ」

「……ええと」

種子島の空の上、顔も知らない相手と交わした会話を思い出す。軽快で、どこか心躍った。あの時も、こんな顔をしていたのかな。

「結婚って、一生一緒にいたい人とするものでしょ？」

「……ふえ？」

くるくる変わる表情と、間拔けな声と半分開いた口元。警戒も不信もなく、率直な困惑を浮かべる顔は本当隙だらけ。さっきまでとは、別人みたいだ。こっちのほうはずっといい。

「だから、結婚しよう。順番は逆になっちゃったけど、はじめもつきたい。えっと、その、婚前交渉って言うの？そういうのはちよつと……」

言葉がだんだん小さくなって、周りの音が耳に染む。しん、と。雪の落ちる速度にも、星の瞬きにも廃墟の記憶にも音があるんだ。

「……は、はは」

どきどきしながら返事を待っていると、スレインが顔をくしゃり歪ませ、大きな声で笑い出した。無邪気で明るい、初夏の少年のような笑い声。こんな笑い声は初めてだ。

「そんなに笑うかな」

腹を抱えて引き笑いに変化した声に、つい拗ねたような声が出てしまった。スレイン

は舐を指で拭い、歯を見せる笑顔で僕を見た。

「いや…。お前は本当に、頭がいいのか馬鹿なのか。冷静なのか馬鹿なのか。真面目なのか馬鹿なのか、分らないな」

「…それ、褒めてないよね。馬鹿って三回言ったし」
「褒めてるさ」

スレインが左手を差し出した。

「いいよ。お前ならいい。結婚しよう」

その手を乗せる。まるで天使の羽のように軽い手だ。

「まさか、こんなところで結婚式をするとはね」

スレインが笑った。

「全くだ。しかも相手がお前とは」

本当、そう思う。でも。この雪と星が、朽ちた天井が、祝福めいて映るのは、きつと相手が君だから。

「でも、悪くないでしょ？」

「うん。悪くない」

手をそっと引く。

「行こう」

「ああ」

握り返される。全く自然に、呼吸のように。そうして二人、足を踏み出す。

月の光が雪上の星屑を淡く白く翳ませる。

朽ちた教会。半分崩れた屋根の下。雪の積もったバージンロードを歩む血で汚れた軍靴とあかぎれた素足。額の割れたマリア像へ、一步、また一步。夜空のシャンデリアの下、埃と雪と静けさだけが来賓。

パイプオルガンが目に残まる。調子の狂った不協和音の讃美歌を、彼は弾いて僕は聴いた。ついこの間のことなのに、その時感じた焦燥や困惑は今はない。今、奏者はいない。白鍵と黒鍵は雪を乗せ沈黙している。こんなことなら、讃美歌の一つでも知っていたら良かった。あの時、彼が奏でたのは。光。そう。彼方の光。

空気が澄む。雪の落ちる速度まで聞こえる。僕の耳に温もりの灯る掠れた声。横目で見ると目が合った。細く開いた唇からは、凍える大気に優しく響くテノールが。

歌を歌うところなんて初めて見た。素っ気ない横顔で、気障なやつ。本当、敵わない。今この瞬間、雪に溶けこの耳に届く美しい旋律は、いつか聴いた調子の外れたオルガンの連なり。

『なんていう曲？』

『お前は知らない』

そうか。スレインは知ってるんだ。歌。僕はその歌の背景に、かつて彼の妻であった名も顔も知らぬ姫を思う。彼を愛した人を思う。うなじの一欠け。小さな前歯の持ち主

を。アルファでありながら、オメガに抱かれることを選んだ女性。彼女もまた、彼の未来を願った一人。行く道あれと。幸多かれと。

ステンドグラスは夜に色を落とし、扉めいた鏡のようにそこにある。映り込む冬の空気が。雪。星。そして人である僕ら。

立ち止まる祭壇の前。牧師も聖書もなく、そこに在るのは美しい顔を割り何も言わない聖母像。胸に抱くイエス。彼女は何を祈ったか。それは本当に彼女の願いであったのか。それは誰にも分らない。

僕らが祈るのは、神ではなく未来に。本能ではなく理性に。

向かい合うと照れくさくて可笑しい。スレインが肩を竦めた。唇は閉じているが、歌の名残が耳にある。

「今日より良き日も悪き日も」

スレインの声。参ったな、僕は聖書の文句なんて知らない。

「富める時も貧しい時も」

お前の番だぞ、と言いたげに碧の瞳が上に寄った。テレビドラマで見たくらいの記憶を辿る。チャチなセットの面白くもないドラマだったけれど、純白の花嫁の後ろ姿が綺麗だった。そして、彼女を迎える新郎役の表情。すごく緊張していて、中学生だった僕は大人なのにこんな顔をするんだと意外に思った。でも、きっと今の僕はあの時の役者よりずっと不器用で堅いだろう。

ああ、思い出した。

「病める時も」

スレインが片目を瞑った。このタイミングでウインクとは、余裕がある。少し悔しい。

「健やかなる時も」

粉雪が金糸を覆い、肩に積もる。悪魔から身を守る祈りのヴェールのように。

「愛し慈しみ。そして」

空から降るヴェールを指で払う。顔を寄せると、閉じた瞼を縁どる睫毛を飾る雪の結晶が見えた。顎を支え、両目を瞑る誓いのキスを。

触れ合った唇はとても冷たい。澄んだ香りと苦い味が舌に残った。

僕が言う。

「死が二人を別つまで」

一歩下がって、片膝をつく。こんな気障な仕草するのは初めてだ。心臓の場所に右手を。左手を彼へ。左手が僕の手の上に。触れ合う掌と掌がジグソーパズルのように合わさった。一度目を閉じる。この手の形を、皮膚を、骨を、爪を、血管を、温度を、そして。

硬さを。柔らかさを。そして生ける匂いを。

「この手を離さないことを、ここに誓います」

「はい」

力を解き、左の五指を包む。僕より細くて、関節が出っ張る白い指。薬指を口に含み、指の根元に歯を立てる。

「この指に、誓います」

歯型のリングを着けた左手を、僕は両手で包み込む。この手を愛している。この手を離さない。僕が掴めたもの。今ここに在る命。

「…はい」

この先。どんなに遠くへ行っても、血に塗れ焦げ付き硝煙の臭いが取れなくなってしまう。この手は決して離さない。

手と手。それだけ。僕らには、それさえあればいい。

「ずっと一緒にいよう。死ぬまで」

見上げた顔は、不細工に歪んでいた。なんだよ、その顔。初めて見る。泣いてるのか、笑っているのか、それとも怒っているのか。どれがどれだか分からない。そんな顔。

「スレイン」

名前の返事は、声ではなく、手を振り解き飛びついた両腕。尻もちをついて座り込んだ僕の耳のすぐ、嗚咽が混じった声が言葉を紡いだ。

「…その日が、霞んで見えないくらい遠くにあればいい」

ぎゅうぎゅう絞める両腕はどこにこんな力があったのか、と思うくらいで息苦しい。背中に腕を回して力を込めると、肋骨の感触が腕に痛い。こんなに痩せて細くても、こ

んなに傷痕が残っていても、んなに体液と過去の罪に汚れていても、それでも心臓は動いている。こんなに綺麗なこゝとつてない。

「生きるだけでいいんだ」

視界は壁面から空へ転回し、背中に感じる冷氣と柔み、僕の重みできゅ、と潰れる雪の音。見上げた先から降るキス。額、頬、そして瞼。唇は震えていた。後頭部を引き寄せ唇を噛む。歯は硬い。舌は甘い。唾内は熱い。引き寄せた体は互い違いに鼓動を刻んだ。生きている。それぞれに。

bond bite

「番」とは、アルファ-オメガ間に発生する生殖に関する特質である。

性行為の際にアルファがオメガのフェロモン分泌腺であるうなじを噛む (bond bite) ことで、体質が変化する。以後オメガから誘引フェロモンは分泌されなくなり、番になった (bonded) ことが周囲にも判別できるようになる。

番への欲求は本能的なもので、男女の恋人関係や婚姻関係より強い。番を持つオメガは、番のアルファ以外との性交に発汗、動悸、熱感、悪寒、震え、眩暈、嘔吐などの症状を示し、以後は番とのみ行為に及ぶようになる。

神経系が密集したうなじを噛む行為はオメガの体質を作り変えるため、身体的負担は大きい。そのためオメガは生涯にただ一度だけ番となる。

特定のアルファが死亡、もしくは他の個体と番になった場合は、オメガは一方的に番を解除されることになる。番を失ったオメガは非常に強い精神的ストレスを負ったまま発情期が再発するため、短命である場合が多い。

To the south.

田園地帯を横切る鷺の白。もう夏だ。

地平線まで伸びる草臥れた道路の凹凸を跳ね返す軽トラックの助手席で、僕は聞いてみた。

「調子はどう？」

いつもの台詞を言うのは僕。何度も何度も同じことを言って、まるで戯曲の台本だ。でも、僕は今を生きていて、僕らの生き方は誰かの作り物じゃない。

フロントガラスの先を見たまま、運転席の彼は笑った。袖を捲った洗い晒しの綿のシャツが風を受ける。

「悪くない」

スレインはちらりと僕を見て片頬に笑窪を作った。

極秘施設から半年。僕らは逃亡劇を続けている。三度、追手にかち合った。一度目は食料をくれて、見逃してくれた。二度目は返り討ちにして、武器と車を巻き上げた。三回目は五人いた。ヒートの中で、もう殺すしかなかった。全員の額を打ち抜いた。オメガのフェロモンが作用する前に息の根を止めた。僕らは番ではないから。目立つ軍用

車を僻地の村で軽トラックと路銀に換え、旅支度を荷台に括りつけたのが三日前。僕らは交代で運転を続け、南を目指している。

どうして南か。理由なんてない。何となく、僕らに似合いの場所だと思ったただけだ。

進む先を見上げると雲が穏やかに流れる青い空。いい天気だ。食料の残りで、献立を頭の中で組み立てる。カレー粉があった。あと米。田を囲む用水路の水は透明だ。飯盒で米を炊くのは火おこしが面倒だけれど、たまにはいい。特に、こんな天気の良い日には。

「昼ご飯は、カレーにしようか。久しぶりに料理がしたい」

スレインが小さく口笛を吹いた。機嫌が良さそうだ。上機嫌、と言っている。

「いいな、それ」

「具は、コンビーフだけなんだけど」

「上等さ」

ハンドルをリズミカルに叩く彼の手。その薬指に、誓いの痕は消えてもう無い。指は手はただ白いばかりだ。日に輝く手のたおやかさを損なわずにいられたことを、僕は誇らしく思う。

「ああ、あそこにしよう。橋がある」

丘へと続く赤い橋。空の青、雲の白、田園の緑と箸の赤。クレヨンのお絵描きみたい。鮮やかで単純な色彩だ。でも、ここは現実。世界の中だ。その端っこで僕らは日を浴

び生きている。

「伊奈帆」

呼ばれて見遣る。

「何？」

スレインは口を結んで、一度ゆっくり瞬きをした。

「……………」

待つ。

待つ。

まだ？

スレインはふう、と息を一つ吐き。

「…いや、何でもない。呼んでみただけ」

ブウン、ギアが上がった。少し尖らせた口元を、僕はしばらく呆けて見つめて。

「…ぷっ」

思わず吹き出す。ああ、だめだ。笑いが止まらない。腹筋が痛い。こんなに笑ったのはいつぶりだろう。初めてかもしれない。どうしよう、ツボに入った。

「…っ、はっはっは」

「…そんなに笑うことないだろうが」

いや、だって。そんな可愛いこと言わないでよ、急に。

あ、そうだ。

「…ねえ、スレイン」

「…何だ？」

ちりり、笑いをこらえた上目遣いが見返した。ああもう、何がしたいかバレバレだ。

「呼んだだけ」

笑い声が二つに増えた。

「馬鹿だな、本当に」

「スレイン」

「ああ」

「ス、レ、イ、ン」

「ああ」

「スー、レー、イー、シー」

「…伊奈帆」

呆れ声。こんな声も出せると知ったのは結構最近だ。

「そんなに何度も呼ばなかったって、ここにいる」

左手がハンドルを離れた。向いた手のひらを手のひらをばちん、と叩く。

「そうだね」

ここにいる。

「ああ」

路の先。青田の波を番の鷺が先へ行く。

僕は番じゃないけれど、ずっと一緒に旅をする。一人になっても、生きていく。辿り着く未来が約束されていなくても。

あとかき

この度は本を読んでもいただきありがとうございます。

早いもので、アルドノア・ゼロで出す本も十冊目となりました。初めて本を出してから約一年、いろいろなお話を凄いいペースで書いたなあと感慨深いです。今回のお話はツイッターでかなたさんが呟かれた「廃墟教会のオメガバース伊奈スレ」というパワーワードに触発されて錬成されました。かなたさん、その節はありがとうございます。そしていつもありがとうございます。あの、好きです（告白）。

伊奈スレのオメガバースは二作目です。今回のお話を書くにあたり前回のお話を読み返したところ、番になることは本当に幸せなことなんだろうか？ヒートって実際のところどれだけ大変なんだろうか？噛みたい欲求と噛まれたい欲求ってそれを愛と呼んでもいいのだろうか？みたいなことを自問自答しぐるぐる考えた末こうなりました。彼らが行く先がハッピーエンドなのかは分かりませんが、これから二人一緒に生きて、できれば笑ってほしいなあって思います。

あと、これはスレインも伊奈帆も知らないことだから本文中に書いてないのですが、灰服時代にスレインがザーツバルムから貰っていた抑制剤と避妊薬は相当きつくて、ヒート時以外にも服用していたので副作用で子宮の機能が低下しているっていう設定①

と、伯爵時代はジャンキーに爪先突っ込んだくらいの酷い生活をしていた上、大気圏突入の衝撃もあり内臓は相当弱っているという設定②があつて、ヒート時であっても妊娠が難しい身体になってしまっているという設定③があります。

伊奈スレの未来って本当に千差万別で、オメガバース一つとっても監獄、同居、逃避行にパラレル、それぞれの世界戦で彼らなりに求める幸せの形って違うんだなあとさめざめと泣きました。沼の深さを再確認しました。ずっとついていきます。

イメージソング

「Far Away」 Libera

四方山話にお付き合いいただき、ありがとうございました。次の本でもお会いできますように。

鳴海

ウユニ塩湖の夜は群青の風が吹く。

「ねえ」

寝転がって見上げた空は星を住まわす海の底。

「ん？」

顔を向けると、逆さまだった。口の場所に目があって、鼻の場所に鼻があって、目の場所に口があって、六時を示す時計の短針と長針みたいに爪先と爪先は正反対。

空と海も逆さま。僕と君も逆さま。まるで下手な解説のジャバウォック。耳まで浸かった浅い湖面は鏡の世界の境目だ。

天と地。朝と夜。月と日。星と虚空。白と黒。クイーンとキング。ビショップとナイト。僕と君。始まりと終わり。

その両者は、対極に見えて連続性を保ち交互に存在する。

「何だ？」

右隣の声。すっかり慣れたようできて、聞く度どきりと鼓動が跳ねる。

好きだな。

水面が揺れ、星が泳ぐ。

「キスしていい？」

「……………はあ？」

幻想的なロケーションで、僕にしてはそこそこロマンティックな提案だったと思うのだけれど。

「今はヒートじゃない」

返ってきたのはしかめっ面。こういう顔が大好きだ、って言ったら、変だって言われるかな。

「うん。知ってる」

次はため息。いや多分、馬鹿だって言われるかな。うん。きつとそう。

「どうして、キスなんか？」

そして心底不思議そうな顔。眉間に寄った皺。生真面目に引かれた口の線。その瞳に宿る那由他の星。

その目の奥の、彼の光。どんな星よりどんな炎よりどんな氷の断面よりも、ずっとずっと綺麗なんだ。

「変な事、言うね」

ちやぷん、と水音。そのくらい静かな星の絶叫の底にて。

僕は笑って。

「好きな人とキスするのに、理由がいる？」

君も笑った。

「…恥ずかしいやつ」

閉じる眼の隅っこに映り込んだのは、弧を描く流星の欠片。

Far Away

発行 Scramble/鳴海
発行日 2019.9.22/ZERO の方舟 11
印刷所 (株) しまや出版様

Mail jjncg720@yahoo.co.jp
Twitter @ narumiblue

Pixiv
<https://www.pixiv.net/member.php?id=955950>

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはご遠慮ください。